その小さな女の子のことが気になってしまったんだが、どう接していけばいいんだろう

すんのはじめ

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

http://www.akatsuki-novels.com/

注意事項

このＰＤＦファイルは「暁～小説投稿サイト～」で掲載中の小説を「暁～小説投稿サイト～」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁～小説投稿サイト～」を運営する肥前のポチに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
　その小さな女の子のことが気になってしまったんだが、どう接していけばいいんだろう

【作者名】
　すんのはじめ

【あらすじ】
通勤の帰り道、いつものところで芝生に座っている女の子。小高いところで遠くを眺めている。雨の日でも傘をさして立ったまま・・きっと足元も濡れてしまっているだろう。気になってしまって・・・やがて、その子と友達になっていくうちに、僕の心の中には、天使のような彼女が住み着いてしまうようになって・・年の離れた女の子とのふれあいが続いていく・・・そして、いつしかと　恋愛感情との間で、迷う僕なのだ

1－1

　その女の子に気が付いたのは、大学を出て、勤め始めて1か月ほど経った時。5時過ぎ仕事を終えて、いつものように自転車でその公園の横を通って、坂を下りて行くのだが、独りぼっちで、芝生の小高い丘に座り込んで、眼下に見渡せる街並みを眺めているのだ。

　僕は、隣の県の大学を卒業して、4月からこの町のスポーツセンターに勤めていた。就職活動も真面目にやってなかったので、年が明けてから、適当なところが無いかと探し当てたところだった。大学の時はサッカー部に所属していたので、スポーツインストラクターということでちょうど良かったのだったが、実際の仕事といったら、グラウンドの整備に雑草刈り、そして、借りる人の受付とかをするという具合だった。最初はこんな調子じゃぁ無かったはずと思ったが、今では、まぁ気楽でいいかーという気になっていた。支給された名刺にもスポーツインストラクターと並んでグラウンドキーパーの文字が書かれていた。土日は勤務日になっていたのだが、僕は気ままな独り暮らしだし、やることも無いので、別に良かったのだ。

　それから気に掛けていると、毎日、その子の姿を見るようになっていた。そして、いつも独りっきりだった。その横には、赤いランドセルが友達のように置かれている。その日は、しばらくその様子を見ていたのだが、女の子は下に広がる景色を眺めて、ランドセルを膝に乗せて台にして絵を描いているようだった。鉛筆だけで、眼の先の景色と手元の紙だけを見て描いているようなのだ。小学校か

らここに来るのには、登坂になっていて、子供の足では３０分近くかかるだろう。だから、その子の家はここの近所なのかなって考えながら、帰って行った。僕は、駅の近くのアパートを借りていて、キッチンのエリアと一応別れている部屋がある１ＤＫということだったが、２階なので日当たりも良かったし、ベランダもあって洗濯機もそこに置けるようになっていたので、ここに決めていた。それに、就職前には知らなかったけど、住宅手当という形で家賃の半分近くが補助されていたので助かっていた。

僕は、雨模様の日は歩いて来るようにしていたけど、その日の帰りは雨が降り出していて、帰る時、その公園のほうを見ると、やっぱり女の子は居た。傘をさして、ランドセルを背負って立ったままで、景色を見ていた。ショートパンツに運動靴なのだが、その足元は濡れてぐずぐずになっているようだった。どうしてなんだと気になったのだが、変に声を掛けたりするのもなぁーと躊躇して、そのまま坂道を降りて帰ることにしたのだが、その女の子のことが気になってしょうがなかったのだ。やっぱり、普通じゃあないな、なんか特別な事情があるんだと思っていた。

1－2

４月も終わりかけで世間はゴールデンウィークになろうかという日。その日は祝日だったけど、僕は出勤日でグラウンドでサッカーをやっている少年たちを見守っていたのだが、お昼休憩の時に、隣の公園のほうに行ってみると、あの女の子が芝生に座って絵を描いているようだったのだ。

改めてみると、長い髪の毛を左右に分けてゴムで留めている様だった。今日は、ランドセルは無くて、本当に独りぼっちという感じで座っていた。僕は、お昼ご飯には自分で作ったおにぎりを持ってくるようにしていた。以前はお弁当屋の配達のものを食べていたが、だんだんと飽きてきていたので、自分で作るようになっていた。何となく、近づいていくと、女の子は水筒をさげているようだったけど、お昼ご飯らしきものは無かったので

「ここ座って　いいかなー」と、言ったけど、女の子はビクッとしてチラッと僕のほうを見ただけで、黙って、又、景色を見て絵を描いていた。長いまつ毛でその瞳も黒く大きく見えて、一瞬、僕はドキっとしたのだ。僕は、構わず、近くに座っておにぎりを取り出した。だけど、女の子は又、ビクっとして、警戒しているみたいだった。

「良かったら　これ　食べてくれない？　僕は、ひとつで十分なんだ」と、差し出してみた。女の子はやっぱりチラッとみただけで、鉛筆を置いて、その細い腕で自分の足とズックを隠すようにして、

真直ぐ前を見たまま

「いらない」と、ポツンと言ったきりだった。だけど、気のせいかその腕が震えているような・・。

「まぁ　そう言うなよ　あやしい者じゃぁないよ　これ、鰹節を甘く煮ただけだけど　うまいぞ」と、女の子の眼の前に差し出した。すると、黙って手に取って食べだしたのだ。

「ありがとう　おいしい」と、又、ポツンと言ったきりで・・前を向いたまま景色を見ていた。５年か６年生ぐらいなんだろうか、色あせたようなポロシャツに赤いショートパンツなんだが、汚れて黒ずんでいるような感じだった。そして、日焼していて褐色の細い脚が見えていた。

「ねぇ　よく　ここに来るの？　きれいだよね　この景色」

「・・・」

「僕は、そこのスポーツセンターに勤めているんだよ　今年からネ初めて　ここに越してきたんだー　だから　知り合いもまだ少ないんだよ」

「・・・」彼女は、左手で足元の小石を拾って、前に投げていた。まるで、早くあっちへ行けって言って抗議しているようだった。

「お嬢ちゃんは　運動は？　好き？」構わず、僕が話し掛けると

「・・・　あのね　お母さんから知らない人に話しかけられても、無視しなさいよって言われてるからー　話さないの！」

「そうなんだ　警戒するよね　ごめん　ごめん　じゃぁ　仕事だから、もう、行くネ　　退散だ　邪魔しちゃってごめんネ」と、僕は立ち上がって

「そうだ　今度は　知らない人じゃぁないだろう」と、立ち去ろうとしていたら、初めて、その子は僕と眼を合わせてきていた。長いまつ毛の澄んだ可愛い眼差しだった。だけど、相変わらず黙ったままで、又、景色を見つめて絵を描いている女の子に戻っていた。

１－３

その日は、少年サッカーの試合なんかも行われていたため、帰りがいつもより遅くなってしまって、もう辺りも暗くなり始めていた。そして、公園のほうを見ると、まだ、あの子が居るのだ。僕は、気になったものだから、驚かさないようにと大きな足音を立てて近づいて行って

「まだ　見ていたの？　もう暗くなるから・・」

「・・・」

「あのさー　お家の人も心配するんじゃぁない？　家　この近く？」

「・・・」

「僕の名前は　北番　秀《きたばんしゅう》　お嬢ちゃんの名前は？」

「・・・」

「もう　知らない人じゃぁないだろう　一人っきりじゃぁ危険だから送ろうか？」

相変わらず、前を向いたままだったけど、ポツンと

「もう　帰るから・・　いいの　独りで」

「そうか　大丈夫かい？」と言うと、その子は走って坂道を下って行った。真直ぐに前を見て、振り返るつもりも無かったみたい。その様子を僕は坂の上から見守っていたのだ。束ねた二つの髪の毛も揺れている感じもなかったので、そうとう早く走っているのだろう。

僕は、その子が見えなくなるまで、そこに居て、ようやく自転車をこぎ出して坂道を降りて行った。何だか、その子に追いつくのも悪いような気がしていたからなのだ。

帰りにスーパーに寄って、おかずとかを買っていたのだが、ふと、おにぎりに入れる具材にあの子は何が好きなんだろうとか、頭をかすめていた。買い物カートを押しながら、あの子と同じくらいの女の子がお母さんに食べたいものをねだっている様な後継が眼に入った。その様子を見て、僕が、余計な事をする必要ないよナァーあんまり、変なことをすると警戒されるナと、思い直していたのだ。

1－4

それから、世間の休日の間には、あの子は公園に来てなかったみたいだった。僕は、その間、おにぎりを用意して持っていくようにしていたのだが。

そして、小学校が始まる日。仕事の帰りに公園を見てみると、あの子が座っていた。僕は、傍に寄っていって

「やぁ　来てたんだ　隣に座っていいかい？」

「・・・」　僕は、構わず座っていた。だけど、その子は自分の座っているところをずらすようにしていて、少し避けているような感じだった。

見ると、今日も何かの紙に鉛筆で街の絵を描いていた。それも、かなり細かく丁寧に描いていた。おそらく、上手というのだろう。だけど、よく見ると何かのプリントの裏みたいだった。ランドセルを膝の上に乗せて、それを下敷きがわりにして、街並みと手元の紙を交互に見て、僕のことなんか無視しているようだった。確か、この前までは髪の毛を両方に二つに分けていたと思ったが、今日は後ろにひとつにしてゴムで束ねていた。半袖のチェックのブラウスを着ていて、細い首がのぞいていたのだが、その襟元は擦り切れてきているようだった。申し訳ないけど、僕はこの時、この子はあんまり家の人から構ってもらえてないんだなって考えていた。

連休中に遊びに行ってきたという職場のパートさんからもらった
どら焼き饅頭があったのを思い出して、

「もらったんだけど　これ食べるかい？　僕はあんこ苦手なんだ」
と、彼女の横に包みのまま置いた。彼女はそれをチラッと見たけど、
又、無視したように絵を描き続けていた。

「じゃぁー　じゃますると悪いから」と、僕が立ち去ろうと歩いて
いる時

「ありがとう　おじさんって怪しい人じゃぁないよネ」という声が
背中から聞こえた。振り返ってみると、彼女はそのどら焼きを喰ら
いついているようだったけど、僕には彼女の小さな背中しか見えな
かったのだ。

だけど、帰り道、ようやく打ち解けてきてくれたような気がして、
僕は晴れやかな気分だった。だけど、おじさんは無いだろー

1－5

次の日は朝から雨が降っていて、夕方になるにつれて強くなってきた。僕は、今日は雨模様なので歩いて来ていたのだが、帰るとき公園に眼をやると、あの女の子が傘をさして立ったまま下の景色を見詰めていた。

僕は、気になってしまったので、近寄って行って

「どうしたの？　こんな雨が降ってるのに・・　何　見てるの？」

「・・・」

「相変わらず　だんまりかい？　もう　足元がずぶ濡れじゃぁないか」と、僕は着ていたナイロンジャンパーを脱いで、その子の腰から下に巻いていった。その時、腰を引くようにして

「あっ　いいんです　構わないでください　こんなの困るぅー」

「だって　冷えるだろう　そんなに濡れて　風邪ひくよ」と、僕は構わず、女の子の腰の前のところで袖の部分を結んでいって留めていた。

「・・・すみません」

「いいんだよ　ねぇ　ここで　何してるのー　いつも　景色見て」

「・・・」

「あぁ　ごめん　余計な　お世話だよね　じゃぁ　お嬢ちゃん　名前ぐらい教えてよー」

「ゆきむら　ななの」

「なんのちゃんかぁー　きれいな名前だね　どんな字なの？」

「なっぱ　なっぱ　野原の野」

「へぇー　かわいいね　何年生？」

「６年」

「そうか　でも、今日は雨だし　暗くなるの早いから、もう帰りなさいよ　おうちの人も心配するだろう？」

「・・・　ダメなの　６時過ぎるまで・・・」

「・・・ダメなのか　ふ～ん　じゃぁ　もう少し　僕も付き合うよ」

「あっ　いいんです　これ　お返しします　帰ってください　私ひとりで大丈夫です」

「ああ　まぁ　いいじゃぁないか　今日は　絵　描けないね　絵

描くの　好きなの？」

「・・・そーいうわけじゃぁないけど・・　でも　絵　描いている
と　色んなこと忘れられるから・・・」

「そうかぁー　でも　上手だよ　絵　この前のも　丁寧だし」

「あのね　ななはね　絵を描くのにね　あのお家は幸せなのかなー
不幸なのかなー　とか　多分、赤ちゃんが居て、笑っているんかな
泣いているんかな　とか　お金持ちなんだろうか、それとも貧乏
会社だったら　社長さんは怖いんだろうか優しいんだろうかなんて
　想像しながら描いているんだぁ」

「そうかぁ　楽しそうだね　君の夢はなんだい？」

「・・・私は・・・夢なんて　持たないようにしてる…持っちゃぁ
ダメなんだよ！」

「そんなー　これからだろう　まだ　・・・　そのー　子供なんだ
から」

「そりゃー　いろんな人いるよ　もう　帰るね　おじさん　ありが
とう　ジャンパー　温かかったヨ」と、言うとジャンパーを僕に返
して、傘をさしたまま走って坂を下りて行った。

やっぱり、あの子は複雑な事情を抱えてるんだと僕は考え込んで
いた。そして、決して幸せな環境では無いのだろうと。その日は、

買い物に行って、若干のお菓子とスケッチブックを買っていたのだ。

１－６

次の日は朝から素晴らしく晴れていて、僕は朝からグラウンドの伸び始めた雑草を除去していて、午後からもその作業をしていた。４時すぎになって、女の子がやってきて、何故か僕のほうをしばらく見ていたが、公園に向かって行った。

仕事の終了時間になって、僕は公園を目指していた。少し、ドキドキしているのが自分でもわかっていた。近寄って行って

「やぁ　こんにちわ　晴れてよかったネ　これ　クッキー食べなよー」

女の子はチラッと見たけど、何にも言わないで、何かのプリントの裏なんだろう、その紙に絵を描き続けていた。僕は、予想していたことなのでポリ袋に入ったお菓子を彼女の横に置いて

「あのさー　事務所に誰も使わないスケッチブックがあったんだよこれっ　使ってくれないか？　誰も使わないから、もったいないからね」と、スケッチブックとビニールの袋に２ＨとＨＢ・２Ｂがセットになったものを、彼女の前に置いた。

彼女はしばらく、それを見詰めていたけど、邪魔なようにそれを振り落として、絵を描き続けていた。

「じゃまするると悪いから退散するね」と、僕が帰ろうとして数歩歩

いたところで、彼女が追いかけてきて

「あのー　こんなの貰う　わけに　いきません　返します」と、スケッチブックと鉛筆を持って差し出してきた。

「どうして？　それで、素敵な絵を描いてよー　僕に　ねっ　なななのちゃん」と、笑ったつもりだったのだが・・

「・・・」ななのちゃんは、しばらく立ちすくんでいたが

「あっ　私　お尻　濡れている　やだー　おしっこもらしたみたいになってる」と、お尻の部分を押さえていた。彼女は多分、ハンカチを敷いていたのだろうけど、昨日の雨が浸み出していたみたいだった。

「うふっ　だね　ななの赤ちゃん」

「ちゃうわー　私・・　あのさー　なんで　おじさんは　ななのこと　そんなに構うの？」

「なんでって・・・ななのちゃんは友達だからかなー　それに、おじさんは可哀そうだろう？　せめてお兄さん」

「友達？　ななは　暗いし、笑わないから　みんなから除け者なんだよ」

「そんなー　人間はみんな　誰とでも友達になれるように生まれて

きてるんだよ　ななのちゃんだって」すると、ななのちゃんはしばらく考えている様子だったが

「・・・」黙ったまま、スケッチブックを抱えて、振り向いて戻ってった。だけど、長いまつ毛が濡れていたように思えていた。そして、ショートパンツの赤が湿って濃くなったところが、くっきりとその可愛いお尻の部分に見えていた。

　そして、次の日も快晴で、公園にはあの子の姿が見えた。僕が近寄っていくと、顔をあげて、僕の顔を見るなり

「シュウ君　この鉛筆書きやすいの」と、初めて見るような可愛い笑顔をしてきた。そして、描いている絵を見せながら

「ここのおうちは　女の子が学校から帰ってきて、お母さんにおやつをおねだりしているところにお兄ちゃんも帰って来たの　ここのおうちは泣いている赤ちゃんをお母さんが抱っこしてあやしているの　ここのおうちはね　お父さんがお仕事お休みで子供とお庭でボール遊びしてるの　・・・それからね・・・ここのアパートの部屋では・・・学校から帰ってきた女の子が・・・誰も居なくてね・・・」

　それ以上は、言葉が続かなかったけど、僕は、その時、ななのちゃんの家庭環境を一瞬見えたような気がしていた。

「そうか　いろんなことを考えながら描いているんだね　だから、絵の中の街が生きているんだ　上手だよ」

「そう　シュウ君のために　一生懸命　描いているんだよ」と、照れくさそうに絵に向かっていた。

「ななのちゃん　僕のこと　友達って認めてくれたんだ」

彼女はしばらく考えている素振りだったけど、黙ったまま頭を下げて大きく頷いていた。その時から、僕とななのの触れ合いが始まったのだ。

それからは、気軽に挨拶程度は交わしてくれるようになり、僕は、時々お菓子を持って、その場所に訪れていた。

２－１

梅雨の合間の暑い日、僕は、グラウンドの除草作業で端っこのところで、強い日差しを浴びて、草をむしっていると

「シュウ君　暑いのにご苦労様」と、明るい声で・・・なななのちゃんだ。膝をさすりながら、側に寄ってきてくれた。

「おっ　帰ってきたのかー　あれぇー　その膝　どうしたの？　血が滲んでるよ」

「うん　そこで　溝を飛び越える時、すべっちゃったー　でも　平気だよ」

「平気だよじゃぁないだろー　バイ菌が入ったら大変だよ　洗おう」と、ななのちゃんの手を握ろうとして、ホールの横にある水道のところに連れて行こうとしていた。だけど、ななのちゃんは咄嗟に手を引っ込めていた。でも、初めて触れるんだけど、ちっちゃくてキャシャな手で鶏のチューリップなんかの骨よりも細いなと感じた。

側溝を乗り越える時、繋いでいた手を放してしまった時

「いやだぁー　離したら・・」と、小さな声が聞こえた。

「エッ」と、振り向いたけど

「何でもない　もう　ええねん」と、下を向いて答えていた。
　水道のところで待たせて、事務所からガーゼを持ち出して、擦り傷に付いている砂を洗おうと水に浸して触ると、ビクッとして細い腕で膝を隠すようにしていた。
「痛いよー　もう　ええってー」
「これっくらい我慢しろよ　ちゃんと砂くらい落としておかないとなー」と、ななのちゃんの膝を支えながら、その時、彼女は震えて怯えている感じだったのだけど、僕は、その時、気に留めずに、汚れをふき取って傷テープを貼っておいた。
「よーし　これで　いいよ　そうだ　今日は日差しも強いから、帽子貸してあげるから　被っておけよ」と、僕の被っていた麦藁帽を渡そうとすると
「いらん！　今日から　あそこの建物の中で描こうと思ってんねんあそこやったら、雨でもあんまり濡れへんやろー」と、公園の端のほうにある屋根付きのベンチを指さしていた。
　そこは、見晴らしとしては少し悪くって、僕の居るグラウンドからは見通しも良くないので、ななのちゃんの姿があんまり見ることが出来ないので、少し気になったが日差しを避けるためには仕方がないかと思っていた。
　仕事の時間が空いた時に、僕は缶ジュースとパイ菓子をもって、

ななのちゃんの様子を見に行った。相変わらず、景色を描いている
ようだった。

「暑くないかい？　これ　差し入れ　休憩しなよ」

「ありがとう　ちょっと　喉が渇いていたの」

「これからは　水分取らなきゃー　熱中症になるよ」

「そうだね　水筒持ってくる」

「もう直ぐ　梅雨があけて　夏休みだね　ななのちゃんは家族でど
っか出掛けるの？」

「・・・」ななのちゃんは黙ったまま、自分の足もとを見たまま下
を向いていた。その時、長いまつ毛が濡れているような気がした。
一瞬、しまった　悪いことを聞いてしまった　と僕は、後悔してい
た。その場を立ち去ろうとすると

「あのなー　シュウ君　ななは　お父さん　おらへんねん　お母さ
んと　二人っきりなんや　だから　お金も余裕ないねんて」

「そうか　さっき　悪いこと聞いてしまって　ごめんな」

「うぅん　かまへんでーー　シュウ君　友達やから　話しておいた
ほうが　気が楽やしなー　それに、この前　なな　久しぶりに笑っ
たみたいやった」まつ毛の奥の黒い瞳が光っていた。

「そう　ありがとう　でも　ななのちゃんは明るくていい子なんだからな」

「そんなことないねんで　学校ではなな、暗いから　友達も近寄らへんねん　シュウ君だけや　気楽に話せる気がする」

「おぉ　何でも話してくれていいんだよ　相談にも乗るからー」

2－2

それから、雨の日でも公園のベンチにななのちゃんは来ていた。毎日、僕は、近寄っていて何かしら声を掛けていたのだけど、黙ったまま絵を描いている時もあった。

夏休みになって、朝から来ている様だった。僕は、気になって、お昼休みに寄って行ってみて

「ななのちゃん　お昼ご飯は？」

「ウン　おにぎりと水筒持ってきてるよ　梅干しとかキュウリの塩もみなんだ　でも、大根の葉っぱ炒めたのは、あんまり好きじゃぁないの」

「そうか　食べてんならいいんだけど　なんにもないんかなって思ってな」

「大丈夫だよ　シュウ君　心配してくれてんだぁー」

「まぁな　一応　不思議ちゃんだからー」

「なによー　ななちゃんには　シュウ君のほうが不思議ちゃんだよ私みたいな子に声掛けてきてー　彼女とかに叱られないの？」

「あぁー　彼女なんか居ないよ　そういう縁は無いなぁー」

「そう　とりたてて女の子にもてる雰囲気ないもんなぁー」

「悪かったなー　こっちに　その気が無いだけやー」

「うふっ　でも　シュウ君　なかなかいけてるよ」

「からかうんじゃぁないよ　子供のくせして」

「・・・そんなのー　直ぐに　ななは大人になるよー」

「そうか　そうか　いつかみたいに　おしっこ漏らしたみたいになんなきゃぁーな」

「・・・あー　だからっ　ちゃうってー　あん時はぁー　もうぅーやだぁー」と、ななのちゃんは、僕の肩を叩いてきていた。

「へへぇー　あのさ　あさって　僕は休みなんだ　こどもの森に行ってみないか？　１時間ほど歩くけど　スライダーとかあるみたいだから　いつも　ここじゃぁ　つまんないだろー」

「・・・なんでー　なんで、ななを誘うの？」

「なんでって　ななのちゃんが楽しんでくれればいいかなーって」

「・・・行く　本当に連れてってくれるの？」

「ああ　もちろん　君が良けりゃー」

「ななちゃんは　楽しみに　してる」と、小さな声で下を向いて答えていた。

２－３

次の日、ななのちゃんに会った時

「昨日、ななネ　お母さんに　遊びに行くこと話したの　スポーツセンターの人とって　それと友達３人位ってウソついちゃった　そしたら、変な関わり方しないでねって、言われちゃった」

「心配なんだろうね　まして、女の子なんだから余計だよ」

「シュウ君　変な人？」

「お母さんからしたら変な人だろうな　一緒に遊びに行くなんてとんでもないって言うだろうね」

「でも　変なことってしないよね？　シュウ君は」

「もちろんだよ　ななのちゃんは友達のつもりだし・・　誘ったんは、君がいつもひとりぼっちだから・・　お互い　楽しめればいいかなって思ったんだ　迷惑だったカナ？」

「ううん　お母さんには　ウソついちゃったけど　ななは行きたい」

「ウン　あのさー　これ　暑いから　余計なお世話なんだけど　買ってきた　明日、被っておいでよ」と、昨日、買ってきたつばがそんなに大きくなくてリボンとか花飾りが取り換えられる麦藁帽を渡

しながら

「・・・　こんなの　困るぅ　帽子なんて要らないから・・」

「そう言うなよ　熱射病になっちゃうよ　これ　折りたためるらしいから、しまっとけるだろう」

ななのちゃんは黙ったまま受け取っていた。たぶん、戸惑って考え込んでいるみたいだった。その日、別れる時も、黙ったままだったのだ。

２—４

当日の朝、僕たちは銀行の駐車場で待ち合わせをしていた。僕は、お昼ご飯におにぎりと考えたが、暑さでいたむ恐れもあるからと、どっか食べ物屋さんぐらいあるだろうと、タオルと傷テープだけを念のためと思ってリュックに詰め込んでいた。ななのちゃんがやってきた時、小さなリュックと麦藁帽を被っていて

「おはよう　シュウ君　これっ　可愛い？」花飾りのほうを付けていたのだ。

「ウン　可愛いよ　それはひまわりなのカナ」

「そう　なな　こんなの初めて　ありがとうネ」

「気に入ってもらえてよかったよ　さぁ　行こうか　誰かに見られると　具合　悪いんだろー？」

「だね　しばらく　離れて歩くね」

と言いながらも、半分ほど歩いて坂道になってきた時、ななのちゃんは後ろから僕の手を手繰り寄せるようにして繋いできた。

「知ってる人に会ったら　親戚のお兄さんって言っていい？」

「あぁ　いいよ　大丈夫？　疲れてない？」

「ウン　シュウ君より　ななのほうが毎日　歩いているよ　平気！」

公園に着くと、直ぐに　ななのちゃんはロープスライダーに走って行って、数人が並んでいたけど、順番がくると、僕に手を振りながら下っていった。その後、駆け寄ってきて

「すんごく　気持ち良かったよ　ねぇ　もう一回　行ってきていい？」と、可愛い笑顔して聞いてきていた。

「ウン　帽子　持ってるよ　飛びそうだろー？」ななのちゃんは帽子とリュックを僕に渡すと駆けて行って、又、並んで、自分の番になると、大きく僕に手を振って、今度は足を広げて下っていたのだ。

その後、長いローラーのスライダーに向かって行って

「シュウ君　前　ななは後ろに付いて滑る」と、僕を前に座らせて、ななのちゃんは僕の背中にくっついて手を廻してきて滑り始めた。真ん中ぐらいにくると

「なぁ　お尻　熱いよ　焼けてるんだ」

「そうだね　じゃぁ　足つけてしゃがんで滑ろー」と、言われるままにして滑り降りて

「うふっ　おもしろい　今度は　ななが　前ね」と、又、僕を引っ張っるように連れて行った。僕は、躊躇したが、とりあえず、なな

のちゃんの腰のあたりを支えるようにして滑ったのだ。何回かそんな風にして滑った後

「ねぇ　なな　おにぎりしてきたんだ　食べよっ」と、木陰のベンチを指さしていた。

「おかか　甘くしたの　シュウ君が　初めてくれた時　おいしかったから」

「そうかー　ななのちゃんが作ってきてくれたんだ　じゃー　うまいだろう」と、僕は、ちょっと感激して食らいついたていた。

「おいしいよ　ななのちゃん　じょうずだね」

「よかった　おいしいって言ってくれて　うれしい」

「ななのちゃんはサー　自分のこと　時々　ななって言うよねー」

「ん　なな　だから　おかしい？」

「いいや　いいんじゃないか　べつに」

その後、森のコースを歩いていると、ななのちゃんは僕と腕を組むように手を繋いできて

「シュウ君　恋人同士ってこんな感じなんでしょ？」

「まぁ　そうだね　残念ながら　ななのちゃんは親戚の女の子だね」

「・・・ななはネ　今日　楽しかったヨ　友達とも　こんな風に遊んだこと無かったし　小さい頃、お父さんと遊んでもらったことあった」

「そうか　そりゃー　良かったヨ」

「ねぇ　今日だけ？　ななは・・　又、遊びに連れていって欲しい」

「あぁー　機会あったらネ」

２－５

次の日、ななのちゃんは僕のあげた帽子を被って来ていた。僕は、とりあえず安心したのだ。

「こんにちわ　ななのちゃん」

「うん　シュウ君　昨日は楽しかったよ　ななネ　お風呂に入ってる時、気が付いたんだけど、手首のとこ　赤くなってた　ロープでカナー」

「そう　必死にしがみついていたもんなー　大丈夫？」

「うん　たいしたことないんやー　平気」と、被っていた帽子を脱いで

「夕立になりそうやねー　あっちの方　空が黒くなってる」

「そうだね　降られないうちに帰ろうよ」

「ううん　まだ帰らない　６時頃まであかんねん」

「そうか　じゃぁ　僕も　付き合うよ」

「あのなー　シュウ君　なな　お父さんおらへんねんって話したやろー　私が小学校に入った頃　突然　おらんようになってん　お母

さんはおらんようになるのって、うすうす知っていたみたいやったけど」
「そう・・・」僕は、何と言っていいのかわからなかったけど、ななのちゃんは続けて
「今から考えたら　お母さんもそのほうが良かったみたい　私が2年になった時やった　学校から帰ったら、お母さんが男の人と下着のまま抱きあってるの見てしもてん　私だって　何してるんかわかったわー　それからな　学校が終わっても、夕方まで家に帰らんようにしたんや　そのうち　自然とお母さんも、ななに6時ぐらいまでは帰ってこないようにって言うようになったの」
「そうかー　そんなことがあったから・・・可哀そうに・・・」
「ううん　そんなことないよ　シュウ君と友達になれたしー」と、それまで下を向いていたけど、まとめた髪の毛のおくれ毛を耳元に掻き揚げるしぐさをして、僕のほうに笑顔を見せてきた。その時、一瞬、女としての顔を見たような気がしていた。
「なぁ　シュウ君　独りなんやろー　マンション　なな　泊めてくれへんやろかー？」
「えぇー　なんてことを・・　そんなことできる訳ないよー　お母さんにも叱られるよ　子供監禁になるわ」
「そんな大げさなもんやなくて　コソッとね」

「だめ　ダメ！　一応　男と女やないか　まして、なのちゃんは子供なんやから　叱られるに決まってるよ　警察にも捕まるわー
なに言い出すねん」

「あのなー　海水浴に行こうって言われてんねん　お母さんからだけど、よその男の人も一緒なんやー　去年も行ったんやけどなー
その人、海の中で泳いでいる時、ななのお尻とか胸とかも時々触ってくるんや　それにな、ななとお母さんがお風呂に入っている時にも、その人も後から入ってきてなー　お母さんが頭洗ってる時、私の身体を洗うふりして、身体中撫でまわすんやでー　それに、ななの手を取って無理矢理あそこを触らせようとしてくるねん　ぃやらしーねん　考えすぎかわからへんけど　私　声も出せなくって
お母さんには、そんなこと言われへんかってんけど・・　今年も、一緒や言うから・・・嫌や　ななは　行きとーないねん　そやから
その時　シュウ君　泊めてーな　シュウ君やったら　変なことしーひんやろー」

「そりゃー　ななのちゃんは　子供やし　そんなことしないけどなー」

「なぁ　お願い　私　独りで留守番するって言うし　そやけどなー
ななは独りだけやと怖いやんかーぁ　お母さんも、男の人とふたりだけのほうがええねんでー　去年も私が寝たと思ってるんか、隣で変な声聞こえてくるやでー　多分・・抱き合ってネ・・　私やって　男と女が何してるんか、もう、わかってるわー」

「うーん　ななのちゃんの気持ちはわかるけどなぁー　でも　それは　もう　ちょっと　なんとか　考えようよー」

「あのなー　うちに来てるのって　その人だけちゃうみたいやねななに、6時前に、急に帰ってきたらあかんって言うねん　そやから、ずーと　ここに来てたのー　お母さん　男の人にいろいろと助けてもらってるって言ってたけど・・・ウチ　お金ないやろー　でも　ななは　そんなお母さん嫌いやー　軽蔑してんねん　そやからななは　お母さんを裏切るようなことしてもええって思ってる」

「だけどさー　まだ　日があるんやろー」

「ウン　1週間後」

「まぁ　考えようよー　僕のとこに泊って、二人っきりって　絶対ダメ」

２－６

「シュウ君　ななナァー　旅行行かへん　お留守番してるって言ったんや　そしたら　お母さん　そうって言って　なんか　ほっとして　喜んでるみたいやったでー　じゃまもんおらへんからなー」

「えぇー　そーなんかぁー　ななのちゃん　それでいいんか？　お母さんと・・一緒でなくて」

「うん　今のお母さん嫌いやぁー　ええんやー　シュウ君と一緒のほうが・・」

「あのさー　僕の実家に一緒に行こうか？　木之本という所　なんにも楽しめるとこ無いけどなー」

「ウン　行く！　ええのぉー？」

「あぁ　しかたないやろー　ななのちゃんと　二人っきりってわけにいかんからなー」

「なんでー　あかんのかーぁ」

「あかん　お嫁入前やし」

僕は、電車の切符をななのちゃんに渡しておいたので、次の駅から乗ると言ってあった。電車に乗り込むと、彼女は珍しくタイトな

スカートで来ていた。だけど、乗り換えの駅まで話し掛けないとい
う約束だったから、眼で合図しただけで、お互い知らんぷりをして
いたのだ。

乗り換えて、隣同士で座っていたけど、緊張しているような感じ
で、ななのちゃんは窓の外を見ていて言葉少なげだった。

「ななのちゃん　めずらしく、今日はスカートなんだ」

「うん　お出掛けだからネ　気分変えた」

駅を降りて２０分ほど歩くのだけど、例の帽子をリュックから取
り出して、被った

と思ったら、僕の手を握ってきて歩き出していた。

「なな　あんなに　長いこと　電車に乗っていたのって　初めてか
も　でも、畑や田んぼばっかーなんだね」

「そーだなー　田舎だからな　この辺りはもっと田舎だよ」

「そーだね　シュウ君もこんなとこで育ったんだ」

僕の実家に着くと、倉庫で二つ上の兄貴とそのお嫁さんが作業し
ていた。実家は椎茸農家で、おそらく乾燥椎茸の作業をしていたの
だろう。最初に、僕達の姿を兄貴が見つけて

「おう　秀　あっ　お嬢ちゃん　こんにちわ　暑かったろー」と、

後ろから、嫁さんの　かがみさんも出てきていた。

「こんにちわ　お世話になります　ゆきむらななのです」と、帽子を取って挨拶をしていた。

「こんにちわ　まぁ　秀君　可愛らしいガールフレンドね」と、

かがみさんは僕の高校の時の同級生で、去年、兄貴と結婚して、同じ敷地内に新居を建てて、実家の椎茸農家を手伝っているのだ。だから、僕は、高校の時のことがあるので、ちょっと苦手なのだ。

そして、母屋に行って、僕の父母に紹介して・・・僕は、予め事情を説明しておいたから、それなりに受け入れてくれていた。

「ななのちゃん　なんにもないところで面白くないでしょうけどね夕方になったら、お風呂に入って　浴衣着せてあげる　近所で借りてきたの　ウチは男の子ばっかーだったから」と、扇風機の風をななのちゃんに向けながら、母は苺の洗ったのを勧めてきていた。

「えー　そんなのー」と、ななのちゃんは僕のほうを向いて「いいの？」と、問いかけているようで、僕は、うなずいて見せていた。

それからは、ななのちゃんは庭に向かって、絵を描いていたのだ。

「想い出だからネ　残しておきたいの」

2－7

夕方になって、母はななのちゃんをお風呂に入れて、浴衣を着せていた。ピンクに花火の絵柄で、髪の毛もかがみさんが来てくれて、長い髪の毛を上に盛るようにして、花飾りもつけて、大人っぽく仕上げていてくれた。

「シュウ君　こんなの　私　似合う？」と、僕の近くに飛ぶように走ってやってきた。

「わぁー　可愛いネ　大人っぽいなぁー」

「そう？　ななは、こんなの初めて　うれしい」

辺りが薄暗くなった頃、かがみさんも浴衣に着替えてきてくれて、ななのちゃんを誘って庭で花火をしてくれていた。僕は、縁側で父と兄貴とでビールを飲んでいたのだが

「やっぱり　女の子は可愛いのー　あの子は特別　可愛い　無邪気で　秀が言っていたような　暗いとこ感じさせないようだ」と、見ていた父が言うと

「秀　どうするんだ　あの子　あんまり　深入りしてもなぁー」と、兄貴が立ち入ってきた。

「どうって　小さいガールフレンドかなー　ほっておけない　気に

なるんだよ」
「だから　深入りするなって　ややこしいことになるぞ　小学生だろー」
「わかってるって　だから　今日は　家に連れてきたんじゃぁないか」
　そして、夜になって、かがみさんが
「秀君　どうするの？　寝るの　一緒の部屋に布団敷いていいの？」
と、意地悪そうに僕の顔を覗き込んで聞いてきた。
「そんなわけないじゃぁないか　別だよ」
「だって　小さい女の子　独りで寝かすわけにいかないんじゃぁないぶっそうよ　預かってるんだし」と、意地悪な眼をしていた。
「うーん　そうかなー　どうしよう」
「うふっ　私が　泊りに来てあげる　一緒に寝るわよ　安心して」
「そうか　頼むよ　助かる　かがみさん　やっぱー　同級生だな」
「ちがうよー　君のお姉さんだからネ　今や　それに　君の大切なガールフレンドだから　あの子　秀君が良いんだったら、お嫁さんになるって言ってたよー　どうする？」

「かがみ　まばたきが多いなぁー　そんな時はからかってるんだろー　わかるよー　高校の時からだからな」

「うふっ　自分で確かめればー　でも　良い子よ」

次の日、ななのちゃんは朝早く起きて、又、庭の絵を描いていた。そして、帰る時、母にそれを渡して

「一生懸命　描きました　きれいなお庭　私の想い出だから　貰ってください」

「まぁ　ななのちゃん　上手ね　飾っておくわ　また　遊びに来てネ　何にもない所だけど」

「いいえ　なな　楽しかった　浴衣も着せてもらえて　初めてだったし　うれしかったの」

早々に帰ることにして、駅まで、兄貴が車で送ってくれて、電車に乗ると、ななのちゃんは腕を組むようにしてきて

「楽しかったよ　よかったぁー　親切にしてくれて　かがみさんおいでって一緒のお布団で抱いて寝てくれたんだよ　胸が柔らかくて・・・　でも、ななは　本当は　シュウ君と二人っきりでも良かったんだよ」と、僕の手を小さな手で握り締めてきていた。

3－1

そのまま夏も終わって、秋にななのちゃんが修学旅行に行くって言っていた。帰ってくるという日、僕は、仕事を終えて、何となく、小学校に向かっていた。

学校に着くと、バスが子供たちを降ろして帰っていくところだった。そして、校庭では、先生の挨拶が終わったのか、父兄がそれぞれの子供たちを連れて帰る様子だった。僕は、それを遠巻きに眺めていたのだが・・・みんながそれぞれに帰って行って、人も少なくなった時、ポツンと一人でななのちゃんが立っていた。

そして、しばしばらくほうを見ていたが、急に走り出して向かってきた。

「遅いゾー　シュウ」と、僕に飛びついて、胸に顔をうずめるようにして腰に手を廻して、しがみつくように、そう言った声は泣いて震えている様だった。

「えぇー　迎えに来るなんて約束したっけぇー」

「だって　帰りのバスの中で　きっと　シュウ君が来てくれているとななはネ　感じたんだもんー　よかったー　信じていて」

その様子を見ていた女性の先生が近づいてきて

「ななのちゃん　大丈夫？」と、不審がって聞いてきた。

「うん　ここみ先生　ななの大好きな親戚のお兄ちゃん　迎えにきてくれたんだぁー」

「そう　良かったね　ななのちゃん」

「うん　一緒に帰るネ」

一緒に歩きながら、僕は自転車を押して

「さっきの人　会ったことがあるよ　保健の先生だろーぅ？　一度センターに来られた時、挨拶したことがある」

「そうなの？　いつも　ななのこと　気に掛けてくれる　優しい先生」

「そうなのか　うん　優しそうな人だネ」

「ねぇ　このまま　シュウ君ち　行っても良い？」

「うっ　いいけどー　まだ　時間　早いのかー」

「そう　まだ　帰るの怖い」

「わかった　いいよ」

僕の部屋に上がり込むと、キッチンの隣の部屋とかバスルームを見て回って

「よし！　女の臭いはしないネ　掃除もちゃんとしているみたい」

「なにを　チェックしてるんだよ　おとなしく座ってろよ」

ななのちゃんはリュックから手帳みたいなものを取り出して

「これっ　お土産　お金も無かったし　これっ　きれいだったからあげる」と、手帳の間に挟んでいた紅葉を取り出していた。

「そうかー　真っ赤できれいだね　大切にするよ」

「うん　なな　こんなことしかシュウ君にしてあげられないから・・」

「いいんだよ　気使わなくって　そんなこと・・　僕は君が元気でいてくれれば、それでいいんだよ」

「ありがとう　ななネ　シュウ君に出会ってから　毎日が楽しい生きているって感じがする」

「そんな　大げさなもんでもないだろー　ななのちゃんは笑ってれば可愛いんだから」

そして、しばらく僕の本棚を物色して、取り出しては読んでいた。

僕がお米を研ぎだすと

「ねぇ　晩御飯？　なに食べるん？」

「あぁ　牛丼の素カナ」

「ふぅーん　野菜は？」

「そんなものは無いなぁー」

「野菜もとらなきゃーぁ　身体に悪いよ」

「わかってるよ　今日はたまたま無いの！　あのさー　そろそろ帰らなきゃーナ　暗くなる前に　送って行こうか？」

「いいの！　まだ　帰りたくないなぁー　もっと　居ちゃーだめ？」

「ダメ！　お母さん　待ってるよ」

「そんなこと　ないと思うけどなー　ねぇ　なな　明日　学校お休みなの　来てちゃぁダメ？」

「何言ってんのーぉ　そんなー」

「ねぇ　お願い　なな　行くとこないの　お掃除しといてあげるねぇ　鍵！　でないと　帰んないよ」

僕は、戸惑いながらも、どうでもいいやーと、スペァの鍵を渡して、途中まで送って行った。でも、小悪魔的な女の子に引き込まれていたのかも知れなかった。

3－2

　次の日、僕は仕事を終えて、急いで帰って行った。部屋に入ると、やっぱり彼女は居て、キッチンのテーブルにうっぷして、うたた寝していた。今日は、髪の毛を留めていないようで、サラサラの長い髪の毛が乱れていた。絵を描いていたのか、途中のままで、どうやら、修学旅行でいった厳島神社の光景を思い出しながら描いているみたいだった。

　僕が傍に立っても気が付かない様子で、衝動的にその髪の毛に触れると、ビクッとして

「あっ　ぁー　私　寝てしまった　お帰りなさい」

「お帰りなさいじゃぁないよ　不用心だろー　独りで居る時は鍵ぐらい掛けときなさいネ」

「あっ　そうか　なんか　安心してしもたー　でも　ちゃんとね　お風呂とお便所　掃除しておきましたよ　旦那様」

「あんなー　・・・　ななのちゃんは・・　まぁ　いいやー」

「冷蔵庫に白菜のお漬物入れておいたの　家から持ってきたんだけど　おいしいよ」

「おっ　それは　ありがたいけど　ななのちゃん　そんなこと気使

うなよー」

「いいの　いいの　こんなものしか無かったんだけど　シュウ君に食べて欲しいから　なぁ　ななが　来てたら迷惑やろかぁー？」

「いゃ　そんなことはないよー　君が居ると楽しいよ　ただ　まわりからしたら　変に思われる」

「そんなもんなんだー　ななは　シュウ君に迷惑がかからないように　目立たないようにするから　ここに、置いてよー」と、訴えるように・・

　彼女は長いまつ毛の奥が潤んでくるような眼で見つめてきた。その時、僕は、衝動的な気持ちを抑えながら

「そんな悲しそうな眼をするなよー　追い出すようなことはしないよ　君は笑顔でいるほうが可愛いよ」と、言うと、途端に僕にとっては天使のような笑顔を見せてきた。だから、やっぱり突き放すようなことは出来ないし、彼女が来るのを心のどこかには期待している部分もあるなと思っていたのだ。

　その後も、描いていた絵の説明をするななのちゃんの、時々、髪の毛を耳の後ろにかきあげるしぐさに、僕はどきどきしながら聞いていたのだ。辺りも暗くなってきたので

「もう　暗くなるから帰りなさいよ　送って行くよ」

「いいの　目立たないように帰ります　ありがとうネ　明日は、公園にいくね」と、帰って行ったのだ。

3−3

冬に向かって、ななのちゃんは僕のマンションにちょこちょこと来ていた。寒い日だったり、雨の日もあったので仕方ないかなと僕も思っていたのだ。

そして、彼女が冬休みになって、僕が年末から正月の間は実家に帰るからと伝えると、例のように悲しそうな眼をしていたのだ。だから、僕は彼女を楽しませようと思い、クリスマスの日にご飯を食べに行こうかと誘ってみた。彼女は一瞬、困った様子だったが

「うん　楽しみ　連れて行ってくれるん？　行きたい」

「そうか　帰り遅くなるけど　お母さん　大丈夫かな」

「そうだね　ここみ先生に誘われてるからって　誤魔化すよ」

「うーん　あんまり良くないけど　僕となんて言えないよねー」

「ウン　だけど　ななもお母さんに誤魔化されているから　ええねん」

当日、僕は半日休みをもらっていて、ななのちゃんは途中の乗換駅まで先に行っているはずだ。降りたホームで探すと、直ぐにななのちゃんは駆け寄ってきた。

「シュウ君　ななは心細かってんヨ　会えるんか不安やったから」

「あっ　すまん　同じ駅から、乗るわけにいかないからー」

僕たちは、まだ少し離れたまま京都駅に向かった。ななのちゃんはダウンコートにすり減ったような運動靴にいつもの短パンで来ていたのだが、僕は予想していたので

「ななのちゃん　僕からのクリスマスのプレゼントするよ　洋服選びに行こう」

「えぇー　うれしいけどー　そんなのシュウ君に悪いよー　クリスマスのご飯だけで十分」

「いいんだよ　ボーナスも入ったし　ななのちゃんの可愛い洋服も見たいんだから」

３－４

遠慮して、しぶしぶ付いてきているななのちゃんを連れて、子供服売り場を見て、黒っぽいけど厚手の生地で花柄が可愛いワンピースとベルト付きの黒靴にソックスを選んで揃えた。そして、髪の毛を留めるリボン飾りも・・。その場の着替えルームを出てくると

「シュウ君　なな　こんなの初めて　変じゃぁない？　可愛いのー？」

「あぁ　可愛いよ　とっても　似合うじゃあないか」と、僕が応えると、とたんに笑顔になって、その場でスカートを広げて回って見せていた。僕は、その可愛い笑顔にホッとしていたのだ。

駅ビルの上にあるレストランに向かっている時、彼女は僕の腕にまるですがりつくようにして歩いていた。京都タワーが窓越しに見えるレストランに入って席についたのだが、彼女は

「うー　嫌　こっち」と、僕の隣の椅子に移ってきて肩を寄せてきていた。

僕は、ビールを飲んでいたのだが、ななのちゃんはジュース類も要らないと言って、お水を飲んでいたが、いろんな料理を頼めるので感激しながら食べていたのだ。

「おいしいよー　こんなの初めて　ななは　シュウ君にこんなの作れるようになりたいなぁー」

「うふっ　そうかい　大きくなったらな　期待してるよ」

「だいじょうぶぅー　来年は中学生だよ」

食事の後は、辺りが暗くなってスカイウォークを歩いた。ななのちゃんは僕の腕を抱き抱えるように歩いていて

「すごい　きれい　すごいねー　ねぇ　ここって恋人同士で来るみたいやねー　私達もそう見られてるのかなー」

「それはないと思うけどー　ななのちゃんが可愛いんで　振り返る人もいるかなー」

「そう？　ななね　こんなに幸せなことって良いんだろかーぁ　サンタさんも羨ましがってるよネ　きっと」

それから、大階段のネオン飾りを見て、帰りの電車に乗った。

「シュウ君　ありがとう　なな　本当に幸せ！　生まれて初めてこんなにうれしかったことなかったんだ」

「そうか　喜んでくれて　良かったヨ」

「私のサンタさんはシュウ君なんだネ」

「そうかい？　恋人じゃぁないんだ」

「そんなことないよ　シュウ君が子供扱いするんやんかぁー　ななは・・」

「まぁ　可愛い妹みたいなもんだよ　僕にとっては」

「すぐ　はぐらかすぅー　そうだ　私　こんな恰好で帰るわけにいかんやんかー　シュウ君チで着替えさせてーなー」

「そうかー　疑われちゃうなー　でも　せっかく可愛いのにネ　また　帰り遅くなるけどいいの？」

「うん　嫌味言われるだけやー」

部屋に入るとベッドのほうで来ていたワンピースを脱ぎ出して、ついでに買った起毛のオーバーパンツも脱いで、僕に向かって

「シュウ君　明日　これ　お洗濯に来るから置いて帰るネ　お母さんに見つかるとヤバイから」と、キャミソールは着ていたものの下は前のところに赤いリボンのついた白いパンツのままだった。

「あぁー　うん　まぁ　隅のほうに置いときなよ　早く、着ろよ寒いだろう」と、言ったけど、子供とはいえ、こっちがドキドキしていた。

あまりにも、遅くなったので、断ってる　ななのちゃんを言い聞かせて、近くまで送っていったのだった。

３－５

正月休みになったのだが、実家に帰るのは明日にして、今日はななのちゃんと過ごすという約束をしていた。僕は、初めての賞与をもらっていたので、父母に何かプレゼントをと思っていたので、正月の間に実家に帰ると言ったら、ななのちゃんは悲しそうな顔をしていたので、帰るのを１日伸ばしていたのだ。

朝９時頃、ななのちゃんは顔を出したのだけど、僕はやっと起きたとこで、ベッドに座って、ボーっとして、今日１日、彼女とどう過ごそうかと考えてるところだった。

「おはよう　シュウ君　サブいよ今日も」と、自分の腕を抱えるようにしていた。

「あっ　まだ　エアコンもつけて無いんだ」と、立とうとすると

「顔　シュウ君が温めてー」と、僕のお腹に顔をうずめて抱きついてきたのだ。

僕の眼の下には、今日は留めていない長い黒髪がかかった小さな肩があった。確かに、冷たいものを感じていて、しばらくは、その頭を抱くようにしていたのだが、僕は股間に変化を感じ始めて、ようやく顔を持ち上げて、彼女のほっぺを両手ではさんで

「もう　温まったかナ　お嬢ちゃん　エアコンつけるよ」

「うぅーーん　気持ちよくて寝ちゃいそうだった　シュウ君の手も温かいー」

その後、お昼ご飯の話をして、ななのちゃんが作ると言ってきた。それで、一緒には行けないので、僕が買い物に行くことになって

「ナスのそぼろ和えとお豆腐のステーキ　この前、京都で食べたやつ　なな　作ってみる」

「そうか　ナスにミンチと豆腐だな　わかった」

「うん　お味噌はあるの？」

「ああ　あるよ」

「じゃぁ　なな　ご米　炊いておくから」と、僕が出て行こうとすると、背中をはたくようにしてホコリを落としてくれていたのだ。

僕が、戻ってきた時、彼女は髪の毛を後ろに留めていて、掃除機をかけていてくれた。そして、以外と手際よく料理をして、食器のお皿が２枚しか無くて、それぞれのおかずを乗せて、ご飯は丼茶碗に入れた。

「ウン　うまいよ　ななのちゃん　やるネ」と、彼女と同じお皿を突っつき合って食べていたのだが

「うふっ　上手でしょ　私　才能あるのかも　こうやっていると新婚さんみたいだネ」

「・・・かもナ　奇妙な間柄」

「うー　もぉー　奇妙じゃぁないよ　普通だよ　今は　友達　ねぇ食べたら　買ってもらったワンピースに着替えて良い？　だって着る機会ないんだものー」

「あぁ　良いよぉ」

彼女が食器を洗っている間に僕はクローゼットからワンピースを取り出してベッドの上に置いておいたら、洗い物を終えた彼女は、ベッドのほうに行って、いきなり服を脱いでいて・・・まるで、僕がいることを意識してない様子だった。今日は、半袖のアンダーシャツに白にピンクの水玉のパンツで、丸っこいお尻を向けていた。

「どう　やっぱり　可愛い？」

「うん　天使だよ」と、僕が応えると、彼女は笑顔を向けたまま、何にも言わなかった。

それからは、トランプをして遊んで夕方になっていた。そろそろ、ななのちゃんが帰る時間になってきて、僕は、用意していたので

「ななのちゃん　これ　正月は会えないので　お年玉」

「えぇー　いいよー　そんなのー　そんなこと　してほしくない！」

「いいから　買いたいものだってあるだろー　なんか」

「だって　シュウ君にそんなことしてもらうわけには・・・」

「いいから　貰ってくれ　なんかに　必要になることがあるかもしれないから　いうこと聞いてくれ」

「・・・ありがとう　シュウ君・・」と、又、長いまつ毛の奥が濡れてきているようだった。そして、ベッドのほうにいって、ワンピースを脱いで、そのままの恰好でハンガーに掛けてシワを伸ばすようにしていた。

「ななのちゃん　先に服を着ろよー　いくらなんでもー」

「なんでー　ワンピース　ななの大切なものなんだもの」

「だからー　パンツのままでー」その時、僕は、初めて彼女の胸が小さく膨らんでいることに気がついていた。

「あっ　そうかー　ななは　べつにシュウ君の前やったら、こんなん平気やー」

「あのなー　ななのちゃんは平気でも　一応　女の子なんやから」

「そう　そうなんや」と、不満げに服を着ていた。

そして、帰る時、やっぱり送って行くというのを断っていて、玄関のドァのところで、僕は、初めて彼女の眼に光るものを見た。だけど、彼女は黙ったまま振り返ることもなく飛び出して行ったのだ。

僕は、気になって、実家に帰る前にテーブルの上に　（２日の夜には帰ってくるから、３日　又　お昼ご飯作ってくれ　ゲームしよう）　とメモを残していたのだ。

３－６

駅に着いて、実家にはぶらぶらと歩いて帰った。家に入るとかがみさんがお正月の用意で手伝いに来ていて

「秀君　いらっしゃい　小さな彼女は置いてきたの？」

「あのなー　彼女じゃぁないよー」

「ふーん　ほったらかしにすると誰かに奪われちゃうから」

「なんだよー　その言い方　けしかけるようなことばっかー」

「ふふっ　ねぇ　私　何か変わったと思わない？」

「うっ　オバン臭くなった？」

「秀君のお餅には唐辛子いれようか？　うふっ　あのね　お腹　ちょっと膨らんでるでしょ」

「あっ　あー　出来たのかーぁ　へぇー　かがみにもなぁー　一応女だったんだなー」

「秀　かがみさんは　あんたのお義姉さんなんだからね　気をつけなさい」と、母が・・

「そうよー　秀君のお姉様よ　おめでとうの一言ぐらい」
「そーだな　おめでとう　あっ　それと　ななのちゃんのことありがとう　喜んでいたよ　一緒に寝てくれたって」
「そう　可愛い子よねぇー　又　連れておいでよー　ねぇ　お義母さん？」
「そーだね　いい子よねー　だけど　まだ　小学生なんだよねー」
と、母も意味ありげにため息をついていた。と、玄関に飾っているななのの絵を見ていた。
その晩は兄貴夫婦も来て、一緒に晩ご飯を食べていた。近くのスーパーで寿司盛りを買ってきたみたいだった。
「兄貴　ベィビー　おめでとう」
「あぁ　６月くらいカナ　男の子らしい」
「おぉー　跡継ぎかぁー　お父さん　良かったなぁー」
「あぁ　でもな　椎茸だけだと先が見えないからな　今　行者茸とか自然薯もやっとる　なんとか　ものになるといいけどー」
「そうかー　大変なんだなぁー　兄貴も」
「そうだよ　なんとか　続けていかないとなー」

「でも　かがみさんが来てくれて、助かってんだよ　よく気がついて、働いてくれるし　ほんと　いいお嫁さんよ」と、ようやく片付けの終わった母が言ってきた。

「お義母さん　そんなー　私こそ　よくしていただいて　幸せです」

僕は、高校時代のがさつな　かがみと違って、あぜんとしていた。女って環境によってこんなに変わるんかと思っていた。

元旦になって、お雑煮を食べて、椎茸を焼いて食べていると、兄貴夫婦が挨拶にやってきた。僕は、父ともう酒を酌み交わして、かなり飲んでいたのだが、かがりさんが横に来て

「秀君　ななのちゃんのこと　あの子　真面目に秀君のこと好きみたいだから　いい加減につきあっちゃぁだめよ」

「かがみさん　酔っているんかよー　いきなり　なんだよー」

「バカ　私　赤ちゃん居るのよ　お酒　飲むわけないじゃぁない
君のことを思ってー」

「そうか　わかってるよ　だけど　難しいことがいろいろとあるんだよー　ヘタなことは出来ないしー」

「まぁ　迷ったことあったら　相談に乗るよ　お姉さんなんだから」

僕は、その後、酔いがまわってきて、なんなんだあいつは・・・
確か、高校の時は僕のほうが勉強は出来たはずだがと思いながら、
寝てしまったようだった。

4－1

米、野菜、そして椎茸を持たされて、それに幾らかの食器を持って、僕の寝床に帰ってきたのは2日の夜だった。そして、テーブルの上に眼をやって・・・絵が置かれていた。あの日の京都駅の大階段の絵。そして隅のほうに

（あの人は幸せをくれる　私もあの人に幸せを返せるようになりたい　たった３日なのに寂しい）　と・・・

僕は、涙が滲んできていたが、絵を眺めていると、階段の真ん中にはなななのちゃんと僕が腕を組んで笑っているような二人が描かれていた。そして、涙が滲みだしてきていた。

その時、僕は、そばになななのちゃんが居たなら、きっと抱きしめていたんだろう。頭の中では、女なのも子供なのも関係ないと思っていた。いつの間にか、彼女は僕の心の中に住み着いていたのだ。

その夜　僕は、変態と思われても構わないと　あのワンピースを抱きしめて寝ていたのだ。

4－2

次の日、僕は、まだ、うとうととしていたのだが、急にベッドの僕の上に飛び込んできて

「シュウ君　元気？」と、ななのちゃんの声だった。鍵を開けて入ってきたのだろう。

「なんだよー　びっくりするじゃぁないか」

「うん　だって　寂しかったんだものー」

「だけどさー　こんなの　恋人同士なんかがすることじゃあないかー」

「ふぅーん　恋人同士じゃぁないと　しちゃーいけないの？」

「いや　そんなわけじゃぁないけど　ななのちゃんは・・その・・」

「ななのちゃんは　なんなの？」

「まぁ　・・・　妹みたいな女の子？」

「なんなの　それっ　変なの」と、離れていってくれた。

その時、僕は彼女も迷っているんだと思っていた。僕への気持ち。

そして、僕がしっかりしないといけないんだとも問い詰めていたのだ。

「今日のお昼はネギ塩豚とほうれん草の卵とじ　材料買ってきてるから・・　ねぇ　なんで私のワンピース　ベッドにあるの？」

「えっ　なんでカナー　整理した時　紛れ込んだカナ」

「ふーん　変なの　ねぇ　今日も　着てていい？」

「あっ　あぁー　良いよー」

早速、来ていたトレーナーを脱ぎ出して、平気で着替え出したけど、僕はそっちを見ないようにしていた。そして、今日は髪の毛を花の髪飾りで留めていた。

ななのちゃんの作ったものは、不思議とおいしかったのだ。この子は料理に関しては才能あるのかも知れないと食べていたら

「お母さんのお料理って　おいしいんでしょ？」

「うーん　だけど　ななのちゃんのもおいしいよ」

「そう？　やりがいあるなー　そー言ってもらえると　お嫁さんになれるカナー」

僕は、この子が時々言う小悪魔的な言葉に惑わされているんだ。

4－3

休み明けの初出勤の日だったが、グラウンドもじめじめしていて、借りる人も居ないので、暇な一日だった。部屋に帰るとななのちゃんが待っていた。

「お帰り　シチュー煮込んでいたんだぁー　シュウ君の晩ご飯にと思って」

「それはありがたい　けど　ななのちゃん　昨日も買い物してくれてるし　使わせてるネ　払うよ」

「いいの　お年玉くれたじゃない」

「それはそれ！　お年玉は君が欲しいものに使いなさい」

「だからー　私の欲しいものは　シュウ君のためになるものにー」

「だけどー　ちょっと　違うんだよなー　例えば　ゲームとか洋服とか」

「いいの　ななは　洋服も着て行くとこないもん　あっ　スケッチブック　新しいの買ったの」

「そうか　それはそれでいいけど　今後のこともあるし　ななのちゃんに　幾らか預けておくよ　僕のために使う用　無くなったら、

又、言うことネ　でも、あんまり高いものは買わないこと」と、戸惑っているななのちゃんに５千円を渡していた。

「じゃぁ　わかった　私　お嫁さんになる勉強だね」と、大切そうに何かの袋にしまっていた。

「ななのちゃん　財布無いのか？」

「うん　持ってない　お金持つこと無かったもん」

僕は、しばらく考えていたけど、適当なものが無かったので、自分の財布を空にして

「とりあえず　これを使いなさい　明日　ななのちゃんの使いやすそうなの　買ってきなさい　この範囲内で」と、又、２千円を渡していた。

「うん　なんか　ななは　シュウ君に迷惑ばっかー掛けてんネ」と、又、悲しそうに下を向いていたから

「そんなことは無いよ　僕は　こうやって　ななのちゃんが来てくれているのって　うれしいんだよ」

「ほんとー　ななも　シュウ君と一緒に居られるのって　しあわせ明日も、なんか作って待ってるネ」と、笑顔が戻っていた。

「そうか　もう　公園に行かないの？」

「うーん　寒いし　ここのほうが安心できる　だめ？」

「いや　べつに　構わないけど　ここが良いのなら　それで良いよ」

僕は、心の底では、罪悪感を覚えていた。なんか、ななのちゃんと一緒に居ると、いつか　自分が悪魔になってしまうんじゃぁないかと恐れていたのだ。

4－4

そんな調子のまま、ななのちゃんは小学校の卒業式を迎えていた。その日、僕は仕事に来ていたのだが、昼過ぎになって、ななのちゃんが訪ねてきてくれた。

紺のワンピースに胸に桜の花飾りを付けていた。そして、髪の毛はいつものようにまとめてなくて、左の耳の上にキラキラ光った髪留めをつけていた。

「どう　シュウ君　可愛いでしょー　お母さんに買ってもらったの卒業したよ」

「へぇー　可愛いねぇー　少し　大人になったんだ」

「うふっ　少しネ　もう　帰るね　シュウ君に見せたかっただけだからー　明日　行っとくね　お祝い　しょうね」と、スカートを翻して行ってしまった。

だけど、僕は、良かった　彼女が嫌っていたお母さんも出席してたみたいだから・・と。

次の日、仕事から帰ると　ななのちゃんが居て

「おかえり　ご主人様　お疲れさまでした」と、正座して迎えてくれたのだ。

「やめろよー　ななのちゃん　そういうのって　悪ふざけだよ」

「そうかぁー　こういうのって　シュウ君　嫌いなんだ」

「うん　なんだかなー　ななのちゃんだから　そんなことさせたくない」

「ふぅーん　今日は　ちらし寿司　作っておいたのよ　冷蔵庫に肉そぼろと卵そぼろ入れてあるから、乗せてね　ショウガもあるし明日のお弁当の分もあると思う」

「んぅー　ななのちゃんは？」

「ななは　さっき　ちょっと　食べたよ　お先で　ごめんなさい」

「いや　それはいいんだけど　せっかくなのに食べて無いのはなーって思っただけ」

そして、僕は用意していた卒業祝いのものを取り出して

「ななのちゃん　卒業おめでとう　僕からのお祝い」中はボールペンとシャープペンシルだ。

「わぁー　ありがとう　なにー　開けていい？」と、ななのちゃんは箱を開けていって

「シュウ君　ありがとう　大切に使うネ　私　勉強するね　中学いったら　シュウ君のためにも」

「あぁ　それはいいけど　僕のためじゃぁなくて　自分ためだろー？」

「どっちでもいいやんかー　シュウ君のためってことはー　私のためよー」

「昨日　お母さんも来てくれて、お祝いしてもらったの？」と、聞いてみたが・・ななのちゃんは、下を向いたまま何も言わなかった。

僕は、しまった　また、余計なことを聞いてしまったと、後悔していた。

４－５

学校が休みになった　ななのちゃんが公園に絵を描きに来ていた。そろそろ温かくなってきたので外に出てきたのだろう。

お昼頃には確かに居たはずだったけど、僕が仕事を終えたときには姿が見えなかった。帰ったのかなと部屋に着くと、ななのちゃんが居たのだ。

「おかえりなさい」と、元気な声で迎えてくれた。

「あぁ　少し、びっくり　家に帰ったのかと思ったから」

「うぅん　だって　晩ご飯の用意してたから・・今日は　肉じゃが食べる前に少し温めてね　それと卵サラダ　冷蔵庫ね　お米研いであるから」

「うん　ありがとう　でも　ななのちゃん　そんなに毎日はいいよー　ずーと　絵を描いていても・・」

「いいのー　こうやってる方が　しあわせ　迷惑？」

「いいやー　ありがたいけどなぁ　今度　僕が休みの日　どっか遊びにいこうか？」

「わぁーい　いこう　いこう　どこ？」

「うん　京都　動物園と水族館　どっちがいい？」

「そうだなぁー　水族館がいい　楽しみだなぁー」

「よし　水族館な　今度は夕方には帰ってこようネ」

「うん　でも水曜日でしょ？　木曜と金曜はダメだけど　それ以外はお母さん帰ってくるの　９時すぎなの　だから、少しくらい遅くなっても大丈夫だよ」

「そうなのか　じゃぁ　ななのちゃんはひとりでご飯食べてんの？」

「うぅん　シュウ君ちから帰るでしょ　それから　ウチのご飯の用意して　お母さん　待ってるよ　それまで、洗濯して、お風呂は先に済ませちゃうけどね」

「感心だね　ななのちゃんはー」

「そんなことー　平気だよ　シュウ君　あのねー」

「うん　どうした？」ななのちゃんが暗い顔して、下を向いていたから・・

「なんか　話があるのか？　いいよ　言ってごらん」

「あのね　私　卒業式の時ね　お母さん来てくれなかったんだよ

でも、働いてくれてるからしょうがないよねと私　晩ご飯作って、待ってたんだ　夜ね　遅く　お母さんが帰ってきた時　、お酒飲んでいるみたいだった　私　悲しくなって　言ってしまったんだ　知らない男の人　家に入れるのも、もう、やめてー　嫌なのって　そしたら　お母さんが怒ってしまって　子供にはわかんないのよ、何も知らないのに親に意見するなって・・　私　そんなつもりじゃぁ無かったのにー　意見だなんて」と、長いまつ毛から涙が落ちてきていた。

その時、僕はその小さな肩を初めて抱きしめたのだろう

「ななのちゃん　お母さんは、君を育てて守ろうと必死なんだよ卒業式のワンピースも用意してくれたんだろう？　君が考えているようなことじゃぁないかも知れないよ　苦労して、色んな事情があるんだと思う　君は言ってくれたよね　ここに居る時がしあわせだって　僕が力になれることがあったら協力するから　そのまま　君は明るく真直ぐに生きていくんだよ」

とたんに、ななのちゃんは、もっと激しく声をあげて泣いていた。ようやく、収まったのか、顔をあげて僕を見つめてきた。まつ毛も濡れていて、僕は完全に女として意識してしまっていた。その可愛い唇に吸い付きたいと衝動的に・・・あっ　だめだ　この雰囲気はーと

「あっ　肉じゃがは　レンヂでいいのかなー」と、ななのちゃんの肩を離して紛らわせていた。

4−6

当日は、やっぱり、乗り換えの駅で待ち合わせをして、ななのちゃんは卒業式に着ていたワンピースで来ていた。だけど、僕がクリスマスの時にプレゼントした靴を履いていた。

京都駅から歩くのだけど、彼女は僕に腕を絡ませるようにして手を繋いできていた。そして、時々、僕の顔を下から見上げてくる顔がすごく可愛らしかったのだ。

ななのちゃんはオットセイと京都の海という水槽のマイワシに興味を示していて、ずいぶんとそこに立ち止まっていた。だけど、ずーと僕の手を離さないで、ワァーと声を上げながら見とれていたのだ。

出てきた後は、お昼を回っていたのだが、清水の坂を歩いてみたいというので、地下鉄に乗って、しばらく歩くのだが四条通を歩いて、途中の洋食屋さんでお昼ご飯にした。

「なかなかフライものはシュウ君に作ってあげれないからね」と言っていたのだ。

僕は、サラッと僕のことを思ってくれている彼女のことが嬉しかった。だから、ふたりともクリームコロッケと海老フライの定食にしたのだ。

「おいしぃー　やっぱり　レストランはちがうネ」と、ななのちゃんは、ほんとうにおいしそうにほおばっていた。

「あのさー　私　清水寺は入らなくてええねん　行くまでの道をシュウ君と歩きたいだけなんや」

「そうなんか　歩くだけ？」

「うん　歩くだけ　腕　組んで　仲のいい　カップルみたいやろー」

「カップルに見えるかなー」

「なんでも　ええねん　カップルでも　お兄ちゃんと妹でも　新婚さんはちょっと無理カナ」

そして、食べ終えて、八坂さんを抜けて、ぶらぶらと歩き出していた。途中、いろいろな店を覗きながら、彼女も「可愛いね　きれいね」とか言っていたものの、それを欲しがる様子も無かったので、僕は、組紐でできた髪留めの飾りを選んで、彼女に買っていた。

「シュウ　ありがとう　可愛い」と、その場で髪留めを付け替えていた。その後は、跳ねるように歩いていて

「ねぇ　シュウ　この辺りを歩いている人の中で、誰が一番　しあわせな気持ちだと思う？　それは　ななよね」

「そうか　それはわかったからー　そんなに大きな声で言うと　逃

げてしまうよ」

「そうか　しあわせは自分だけで感じるものだね　だけど、私は
シュウにも伝えたい」

「僕は　ななのちゃんが　しあわせそうな顔をしていると　わかる
よ」

そして、帰りに駅に着くときは離れていたのだけど、急に傍に寄
ってきて、別れる時に

「・・・いやだ　ちゃんってー　だからね　私のことを・・ななの
って」と、ポツンと言って走って行ったのだ。

4－7

次の日も晴れていて、なのちゃんは公園の芝生で絵を描いていて、昨日、買った髪飾りをしていた。僕は、仕事の合間に近寄って行って

「やぁ　良い天気になったね」

「うん　気持ち良いよ　昨日　ありがとう　楽しかった」

「そうだね　ななの　それ　可愛いよ」僕は、抵抗なく　ちゃん付けをやめていた。

「えっ　うん　可愛い？　シュウ　ななは　もう直ぐ　ご飯を用意して、お帰りをお待ちしています」と、笑顔を向けてきていた。

家に帰ると、飛び出してきてくれて

「今日はネ　イワシ団子　作ってみたんだー」

「へぇー　そんなの　よく　作れたなー」

「ウン　お魚　買う時にね　骨とか取ってもらってネ　包丁で細かくして、卵と小麦粉を混ぜて、焼いたの　後は、大根と油げを煮たやつ」

「そうかー　色々と考えてくれるんだなー　ななのちゃんは」

「うーん　うぅーっ　ちゃん？」

「いや　ななの　だね」

「よーしっ　私ね　家にお料理の本　あるから　見てるんだぁー」

「そうか　でも　それで作れるんだから　ななのは　たいしたもんだよ」

「なんといっても　シュウのためだからネ　でも、本当はネ　シュウに作りたてを食べてもらいたいんやー　いつも　温めさせてゴメンネ」

「そんなことないよ　いつも　おいしいよ」

ななのちゃんが帰った後、本棚の隅に置いてあるノートを見ると、びっしりと細かく丁寧に書き込まれていた。彼女が家計簿代わりに使っているものだ。その日、買ってきたもの、金額と残金。その横のほうには、その日の料理と余ったであろう食材の量。ポリ袋にはレシートの束。冷蔵庫を覗くと、ラップとポリ袋に包んで入れてあり、冷凍のほうのものには日付と食材名を書いて整理されて並べられていた。

確かに、僕もななのちゃんが来てくれるようになって、だいぶ食費が減って助かっていたのだ。

僕は、改めて　彼女が描く絵と同じように、丁寧な性格に感心していて、もしかすると貴重な原石なのかもと考えさせられていた。

4-8

ななのちゃんの入学式の前の日。僕のマンションのほうに来ていて、僕が帰るとお風呂の壁とかを掃除していてくれた。

「あっ　靴下　汚れてない？　そこ　さっき磨いたところだから、気を付けてね」

「えっ　うん　汚れてないよー　ななの　なんか　こうるさい嫁さんみたいだなー」

「だって　明日から中学やんかー　なな　あんまり　来れんようになるかもしれへんしなー　きれいに掃除しとかないと」髪の毛をまとめて上にあげていたから、初めて、彼女のうなじを見て、大人っぽくなったように思えていた。

「そうかぁー　いよいよ中学生かぁー」

「あんなぁー　明日　お母さんも一緒に行ってくれるって」と、ニコニコしながら言ってきた。

「そう　よかったなぁー　ななの　すごく、嬉しそうだよ」

「うん　私ね　この前　お母さんに言い過ぎたと思ってたの　お母さんも言い過ぎたと思ってたみたい　卒業式の時　さみしい思いさせてごめんねと謝ってきてくれたの　それでね　ななのがもう中学

生になるから、嫌がるようなことはしないようにするって、約束してくれたの」

「そうかー　それは良かったネ」

「あのね　明日　式が終わったら　お母さんがお祝いにご飯食べに行こーって　だから、シュウに　制服着たとこ見せれないの　だから、あさってネ」

「ああ　あぁー　そんなの気にするなって　楽しんでおいでよ」

「うん　でもね　これから　もっと　お金に不自由させるかも知れないからごめんねって　だけど　私はそんなの構わないんだー　これから・・・お母さんと一緒だから」と、言っている彼女には暗い影もなかった。

「だけどね　中学生なんだからって　少し、大人っぽい下着も揃えてくれたの　見たい？」

「バカ　そんなのー　見せる奴がいるかー」

「でも　シュウだったら平気なんだけどなー」

「ななの　からかってるんだろー」

「うふっ　ちょっとネ　からかってみたかったのー　だって　いつも　子供扱いなんだものー」

「このー」と、僕が彼女の頭をコツンとすると、彼女は舌を出して
「べぇー」と可愛いらしい顔をしていた。彼女が心からはしゃいで
いるように見えて、僕は安心していたのだ。

４－９　中学入学式

僕が事務所に居るとななのちゃんが訪ねてきて、玄関ホールから手を振ってきた。

「学校　終わったの？」グレーのブレザーに襟元は赤の細いリボンにスカート姿だった

「うん　シュウに見て欲しかってん　似合う？」と、僕の眼の前でくるりと回って見せてきた。僕は、事務所の女の人もこっちを見ていて、視線を感じていたのだが

「あぁ　立派な中学生だよ」と、言ったものの今までと違って、スカートもまだ大きめなのか、ずいぶんと長いもんだなと思っていた。

「あっ　やっぱりかー」と、ななのちゃんは急に言い出して、しばらく下を向いて、じぃーっとしていたが

「ねぇ　シュウ　あんなー　あそこの女の人に話していい？」

「あぁー　べつにいいけどー　何？」

「うん」と、言いながら事務所の中に入って行って、３０代後半の事務員の高沢さんの横に行って、小さい声で何かを話している様子だった。そして、奥のロッカーから小さなものを受け取って、ななのちゃんは高沢さんに頭を下げていた。

「一緒に行かなくて大丈夫？」と、高沢さんは声を掛けていたけど

「大丈夫だと思います」と、ななのちゃんは急いでトイレのほうに走っていた。

僕が高沢さんの顔を見て、何か聞きたそうにしているから、高沢さんは

「急に来ちゃったみたいなのよ！　北番君には関係ないから・・あんまり、聞かないでやってネ　あの子　知り合いなんでしょ　よく、一緒に居るよねー」

「えっ　えぇー　親戚の子」

「ふーん　可愛いわね」と、ふふふっと言いながら、席に戻って行った。

ななのちゃんが出てきて、高沢さんに頭を下げて、僕を外に引っ張るようにして

「あのね　アレ　急に来ちゃったの　油断してたの　私　持ってなかったから　あの人にお願いしちゃった」

「ふぅーん　アレ？」

「うん　もういいの！　あのね　今日は帰るね　あした　シュウの

とこに行ってるから」と、新しい通学用のリュック背負ったかと思うと、手を振りながら長いスカートを翻して帰って行った。

5－1

　それから、ななのちゃんは、しばらくは学校帰りに僕のマンションに来ていて、晩ご飯の用意をしていてくれた。

「ななの　もう　ご飯の用意はいいよ　来るのはいいんだけど、ウチに帰っても、ご飯の用意してるんだろー？　来てもいいんだけど、勉強に時間あてろよ」

「えぇーっ　やだぁー　私　それっくらい出来る　それに、今は通学の途中にあるもん　寄り道じゃぁないよー　シュウのために　なんかしたいの」

「それは　ありがたいんだけど　なななのが勉強に打ち込んでくれたほうが嬉しい　中学になると　いっぱい新しいことやんなきゃなんないだろー　だから」

「・・・来ちゃぁ　だめなの？」

「うーん　だって　もう　気にしないで　家に帰れるんだろーぅ言っちゃいけないことだと思うけど・・だったら、来る理由ないだろー」

「・・・来る　理由あるよー　ななは　シュウと同じ空気吸いたいし、シュウの匂いを感じていたい　だって、帰ってもお母さん仕事に出てるし、ひとりぼっちなんだよ」

「・・・ななの・・・でも　ここでは、勉強の時間にあてろ」

「わかった　じゃぁ　ご飯作るのは　土曜と日曜だけにする　だったらいいでしょー？　じゃぁないと　シュウ　私の愛情こもったの食べれなくなるんだよ！」

「・・・ななの　又　からかい始めてるだろー？」

「そんなことないよ　私　ちゃんと　思ってるから　それにね　自分のこと　ななって　やめた　子供っぽいし　もう　中学生なんだから」

「そうか　無理すんなよ　これから部活なんかもあるんだろー？」

「うん　だけど　クラブって　お金かかるじゃん　私　なんにも入らないつもり　私の部活はシュウとの時間」

「あのさー　あそこのセンターで地元の少年サッカーがあるんだよ　土曜日に集まってる　ななの　入らないか　女の子だけのグループもあるんだよ　小学生と中学生」

「あぁー　ダメ　私　運動なんて出来ない　それに　サッカーー？そんなのやったことないから」

「だけど　みんな　何でも初めてってあるじゃぁないか　ちょうど今　中学から始めるって子も居るみたいだよ　やってみようよ

ななの　走るのは速そうだよ」

「だってさー　怪我　したくないもん　ボール追っかけてって　犬みたい」

「一度　やってみればー　補助金もあるから、そんなにお金負担ないよ　それに、そんなの僕がななのの為だったら出すよ　僕は、ななのがグラウンド走り回ってるの見てみたい　ダメかい？」

「・・・ほんと？　見たい？」

「ああ　きっと　君は　全日本になる素質ある」

「シュウ　アホちゃう？　でも　考えとく　ななが犬みたいにボールを追っかけてるとこシュウが見たいんならネ　でも　私　他人と話すのとか集まりって苦手なんやなー」

5－2

次の日、帰ってみるとななのちゃんがテーブルに座って勉強しているみたいだった。

「お帰りなさい　今ネ　今日の学校のこと　復習してて」と、彼女はジャンパーの上着に下は運動用のハーフパンツのジャージ姿で玄関ドァまで迎えに出てきた。

「あぁ　この恰好？　だって制服シワになるやろー　だからー　着替えてん　学校行くときもね　スカートの下は　これ　穿いていくネン」

「そう　今は　そんな色気ないのん　下に穿いてるのが普通なんやのー」

「なんなん？　シュウでも見たいんかぁ？」

「そんなこと言ってないよ　見たいとかじゃぁ無くて　見えるカナって　ドキドキするのがええんやー」

「やっぱり　見たいんやー」

「違う！　って　時代が変わるんやなーって　僕らの頃は　女の子は競ってスカート短くしてたし　別に　見えったて普通やったからな」

「ふーん　それを懐かしがって　おっさんが　盗撮とかするんや」

「うーん　それは別の問題カナ　まぁ　いいや　どうだい？　慣れた？」

「うん　まぁネ　隣の席の　ナナコちゃんと仲良くなっちゃった名前似てるやんかー　話し掛けてきてくれて　直ぐにネ」

「そうか　良かったなー　どんどん　友達増やすといいよ　ななのは明るいんだから」

「そんなことなかったんだけどネ　シュウに会ってから・・　神様がきっと　シュウと結び付けてくれたんだー　ななのこと　憐れんで」

「また　そんな風に言う　君が引き寄せたんだよ　良い子だったから」

「なぁ　私　シュウの言っていたクラブやってみる　あのなー　クラスのリョウって子　始めるって言ってたし　一緒にやろうって誘われたの」

「そうか　じゃあ　クラブの監督に話しとくよ　僕の知り合いの子だって」

「うーん　それもなー　でも　しょーがないかー　僕の彼女ですっ

てわけにいかんもんなー」

「こらー　ななの　また　からかい出したなー」と、僕は、可愛くなって彼女の頭を押さえてしまっていた。

5−3

僕はクラブの監督をやっている朝宮さんに相談していた。地元の建設会社をやっている社長さんで、大学までサッカーをやっていて、膝を痛めて中途で辞めたと聞いていた。

「僕の知り合いの子なんですけど・・今年、中学生になりまして、サッカーをすすめてるんですけどね。もちろん、初めてなんです。運動も・・ただ走るのは速そうなんですけど・・学校では、何のクラブにも入らないって言ってまして」

「おぉ　それは大歓迎だよ　今　女子のほうは小学生中学生併せて15人程なんだけど、今年中学1年の子が2人入ってな、これで3人になるわー　女子はまだ、練習ばっかりで試合出来てないんだ。今年は、出来ると思う」

その後、僕は朝宮さんに知ってもらっていた方が好いと思って、ななのちゃんと出会った時のこととか、お父さんが居ないことを話したのだ。

「その子　僕　知ってるわー　前はグラウンドの端のほうで絵を描いていたんや　ボールがな　その子の傍まで転がって行った時に・・僕に向かって蹴り返してくれたんや　正確なパスでな　びっくりしてもうてな　それで、サッカーやらないかと声掛けたんや　そーしたら　出来ません　と答えたきり、黙ってしまって　その次の日から　あの公園の芝生に移動してしまったみたいやー　悪いこと

したなー」

「そうなんですか　それでね　さっきお話したような事情がありまして　もちろん　会費とかは僕が面倒みますが、スパイクとかユニフォームは誰かのお下がりって無いですかねー　新しいのを僕が揃えると、彼女は気を使うと思うんですよ　そんなんだったら、やらないとか・・」

「ユニフォームは、そんなわけで、まだ、無い　体操服みたいなんで、みんな練習してるよ　靴は誰かにあたってみるよ　育ち盛りだから　小さくなったのを持って居るかもしれんからー　北番君はその子の保護者替わりカナ？」

「えっ　まぁ　近いですけど・・」

「なるほどなぁー　北番君　大学でサッカー　やってたんだってなうちのコーチやってくれると助かるんだがー」

「はぁ　でも　僕は土日と基本的に出勤になってるんですよ」

「らしいな　仕方ないかぁー　でも　夢を捨てていた女の子を一歩踏み出すようにしたのも事実なんだよ　他の子供たちにも・・」

5－4

土曜日の朝、グラウンドにはクラブの少年たちが揃っていて、少し離れて、女の子達が。その中にななのちゃんの姿もあった。メンバーに紹介されている様子だった。並んでいるところを見ると、ななのちゃんはそんなに背が大きい方では無いなと思っていた。まだ、小学生みたいなのだ。

朝宮さんにお願いしていたシューズは、今年、高校になって学校のクラブに入った子が小さくなって残していたものだと、手に入れていてくれた。それを、ななのちゃんに用意したものを穿いていた。

その後は何人かに別れてキックの練習をしていたみたいだけど、お昼前に朝宮さんのもとに行って

「どうですか　ななのちゃん　緊張しているみたいだけど」

「あぁ　初めてなのに　もう　周りに合わせてるよ　もともと勘がいいんだろうな　あの子は伸びるよ」

「そうですか　良かった　見てると　楽しそうにやっているし」

その時、ななのちゃんは僕を見つけたのか、手を振ってきていた。それで、僕も振り返していたのだ。

「北番君　君達は　仲が良くていい関係みたいだな」

「はぁ　あの子が明るくなって　良かったなって思っています　これから、もっと、活発になってくれればと　今までのぶんも」

「そうか　実は、僕も　彼女に期待している部分もあるんだよ　なのの横に居る背の高い子　リョウ　やっぱり、初めてだというんだけどね　あの子もセンスある　この二人は良いよー　楽しみなんだよ」

「そうですか　よろしくお願いします」と、僕は、とりあえず安心していたのだ。

その日、帰るとなのちゃんが部屋に居て、僕の晩ご飯の用意をしていてくれていた。

「お帰り　シュウ　今日　楽しかったよー　あのね　シャワー　借りちゃった」

「あぁ　良いよー　走り回っていたみたいだものなー」確かに、Tシャツと短パンに着替えていた。

「うふっ　汗かいちゃった　今日はハンバーグね　シュウが食べる前に焼いてから帰るから」

「えー　遅くなるやんか」

「いいの　お母さんも帰り遅いしー」

「うーん　じゃぁ　送って行くよ　暗いし」

「いいの！　私　走って帰る　それに、焼き立て食べてもらわないと意味ないよー」

と言っていたけど、自分で焼けると言って明るいうちに帰らせたのだけど、焼きあがったのは、表面が黒焦げになってしまったのだ。

５－５

夏も近くなってきて、ななのちゃんはシャワーした後は、袖なしのワンピースを着るようなっていて、学校帰りの日でも袖なしのＴシャツと短いスカートに着替えていた。

僕が帰ると部屋の中はムーッとする日も多く

「ななの　エァコンつけていいんだよ　暑いんだろう？」

「うーん　部屋に入ると　もぁーっとするけどね　窓開けてれば、少し風が入るからー　電気もったいないなんやんかー　学校から帰ってくると汗だくになるねん　制服のスカート　長いやろー　暑いねん

それに汗臭いと　シュウに嫌われるからな」

「べつに嫌わないよ　どうだい？　サッカーのほう　見てると楽しそうじゃあないか」

「うん　楽しい　あのね　仲のいい　ナナコも入ったんだぁー　それとねリョウは背も高いからってキーパーの練習もやってるんだぁー」

「そうか　人数増えたみたいだね　女子も」

「そうだね　全部で２０人くらい　中学生は９人」

「ふーん　そろそろ　他のところと試合するんかなー」

「どうだろう　試合ってなると　怖いかなー　ぶつかったり、蹴られたりするんでしょ？」

「それはないと思うけどなぁー　どうだか」

「でも、朝宮監督って　優しいよね　男の子には厳しいけどね」

「まあな　男って　女の子には優しくしてしまうんだよ　怖がらせるとどうにもなんないから」

「ふーん　シュウもそう？」

「うっ　うぅん　カナ」

「じゃぁ　私に声掛けてきたのも？」

「うっ　ウン　カナ」

「・・・そうなんだぁー　ななが可愛かったからじゃぁないんだぁー　でも　シュウで良かったー　私」

5－6

ななのちゃんは夏休みに入ると、お母さんの仕事が休みだという木曜日以外は殆ど僕の部屋で過ごすようになっていた。だけど、キャミソールにショートパンツのことが多くって、彼女はそんなこと意識してないんだろうけど、僕は戸惑うようになっていた。春から比べると背も伸びて、胸の膨らみも大きくなってきていたからだ。行き帰りにはその上にサマーワンピースを着てるんだけど、部屋に居る時は暑いからと脱いで勉強している様子だったのだ。

だけど、僕はあえて、そのことを言うと、余計に意識しているように思われるからと気にならない素振りをしていたのだけど。さすがに、僕が休みの時は、朝から彼女の姿と暑さに耐えきれなくて、少し歩くんだけど、こどもの森は涼しいので、ふたりで出掛けようにしていた。それも、二人でお弁当を用意してピクニックのつもりで気晴らしだった。そして、ボールを持って行って、広場でパスの練習とかもしていた。

「シュウと初めてデートしたとこ　あの時は楽しかったよー」

「そうか　ななの　あの時　はしゃいでいたなぁー」

「だって　嬉しかったんだものー」と、僕の腕を取って絡ませてきていた。

彼女は、もう女としてのしぐさを自然と身に付けてきているんだ

と、僕は感じていた。だけど、僕にとっては、まだ子供なんだから
と自分に言い聞かせていたのだ。

「なぁ　暑っ苦しいから　離れろよー」

「なんだァー　冷たい言い方！　最近　シュウって　私に　妙に冷
たいよね」

「そんなこと　無いよ　ななのは　可愛いと思ってるよ」

「そう　カナーぁ　部屋ん中でも　なんか　私に近寄んないよーに
してるみたい」

「それは　ななのの勉強のじゃましちゃぁー　いけないと思って」

「それだけ？」

「うん　まぁ」

「ふ～ん　複雑　私は・・・」

「バカ　僕だって・・　あのさー　実家から　また　ななのちゃん
を連れておいでよって　かがみさんも」

「わぁー　うれしい！　いきたいなぁー」

「お盆の後なんだけどね　近くの祭りがある　花火なんかもやるん

だよ」

「うん　いいねぇー　行く！　連れてってぇー」

「かがみさんはな　１０月に赤ちゃん　生まれるんだって　だから、今度はあんまり面倒みれないかもって言っていた」

「そーなの　じゃぁー　おじゃまかなー」

「でも　いいんじゃぁないか　連れておいでよって言ってんだからウチの母も楽しみにしてるってんだから」

5－7

「お母さんにね　シュウのこと話したんだ　クラブでお世話してくれているお兄さんだって　私　すごく、その人に親しみを感じるって」

「そうかい　お母さんは何て？」

「何にもー　それでね　お泊りの話　私　行きたいんだぁーってお祭りの時」

「あっ　そうかー　反対されたのかい？」

「うぅん　何にも言わなかった　だけど、一度会ってご挨拶したいって」

「そうか　僕も　一度　会ってご挨拶しておいた方がいいのかなって思ってた」

　ある日、僕がグラウンドの木陰でお昼を食べて休んでいると、なのちゃんが女の人と共にやってきて

「北番さん　お母さん」と、紹介されたのは、Tシャツにスリムなジーンを穿いていて、サラサラした髪の毛が長い人。お母さんというよりお姉さんといってても通用するかというくらい若く見えた。

「ななの母です。この子がお世話になっているというので、一度
　ご挨拶をと思って」

「あっ」僕はその場で立ち上がって「いえ　お世話だなんて」と、
なんて言っていいのか、慌てていた。ななのちゃんは公園のほうに
走って行ってしまった。

「あの子　去年あたりから明るくなって・・きっと、北番さんにお
逢いしてからですわ　あの子の感受性が強い時に、私　事情があっ
て、構ってやれなかったの　そんな時に、北番さんに出会って、き
っと救われた気がしたんだと思います　ありがとうございました」

「いゃ　そんなー　僕は　いつも一人で　絵を描いているし、丁寧
な絵だったから　気になってしまって　最初は、お母さんに言われ
てるからと、知らない人とは話しちゃぁダメだって言われてしまっ
て　でも　素直な子で、徐々に打ち解けてくれて」

「あの子　お父さん居なくって・・　寂しいんですよね　私　そん
なこともわからなくって　でも、私も　女一人で育てるのって辛く
て　軽蔑されるようなこともやってしまっていて　ごめんねって思
ってるんです」

「そうですか　でも　最近はお母さんとのこと　楽しそうに話して
くれますよ」

「そうですか　私　仕事で帰り遅いんですけど、あの子、待ってて
くれて、ご飯とかお風呂も一緒なんです　でも、北番さんのことも、

すごく慕ってて・・　今度は、北番さんのご実家に行くの誘われてて、すごく行きたいと言ってきたんです　だけど、女の子ですし・・心配で」

「はい　誘ったんですけど・・サッカークラブに入ればって言ったのも僕なんです。でも、クラブではいきいきと走り回っているんですよ　楽しそうに・・だから、僕の地元の夏祭りなんですけど、僕の父母とか兄夫婦もいますし・・なのちゃんが楽しんでくれればなぁって思っています　女の子だから、僕も、そのへんはわきまえているつもりですし、どうか、許してもらえないでしょうか　へんな意味じゃぁなくて　僕はなのちゃんのことが大好きです　のびのびと真直ぐに育っているのを見ていると嬉しくなります」

「私　北番さんには感謝しているんです　今日　お話できて、安心しました。私　お仕事お休みできなくって、夏休みでも、あの子をどこにも連れて行ってやれなくってー　母親としてはおかしいかもしれませんけど　あの子、すごく、楽しみにしてるんです　ご実家のほうに連れて行ってもらえるのなら、よろしくお願いします」と、お母さんは僕に向かって頭を下げてきた。

その後、なのちゃんを呼んで、一緒に坂道を下りていくのを見ていると、なのちゃんはお母さんに飛びつくように抱きついていて、振り返って僕に手を大きく振っていたのだ。

６－１　ななの　中１の夏　祭り

お盆を過ぎたあたり、僕とななのちゃんは木之本駅に降り立っていた。ななのちゃんはショートパンツにTシャツにリュックを背負って、お母さんからというお土産袋を提げていた。

暑い日差しの中、歩いて実家に向かって、庭先には母がキュウリと小さなスイカを庭先の水道のところで洗っていた。

「あーぁ　ななのちゃん　いらっしゃい　暑かったろー」

「こんにちわ　おばさん　これっ　お母さんから、召し上がってもらいなさいって」と、被っていた麦藁帽をとって、ぴょこんと挨拶をして、持ってきた菓子箱を差し出していた。

「まぁ　まぁ　そんの気使わなくていいのにー　ななのちゃん、大きくなったカナ　可愛らしくて・・　今な　ななのちゃんに食べてもらおうと、スイカ採ってきた　小さいけど、甘いよ」

父も交えて、冷や麦とスイカでお昼を済ませた後

「秀　どうする？　今、縁日で露店なんかも出てるよ　一度　ななのちゃんと行っといでよ　帰ってきたら、ななのちゃん　浴衣用意してあるから、それ着て、花火見に行けばいいやね　こっからでも、見えるけど　もっと　よく見えるとこ行けばいいやね」

「そうだなー　そうしょっかー」
陽が少し傾いてきたのを見て、僕達は地蔵院の縁日を目指した。おそらく、彼女は初めてなのだろう、こういうのは。眼を輝かせて、いろんな露店に興味を示していてはしゃいでいる風だった。まだまだ子供なのだ。院内で願い事を書いて納めるというカエルを買ってあげると、ななのちゃんは内緒と言いながら何かを書き込んで納めていた。そして、家に帰ると、かがみさんが出てきて
「まぁ　ななのちゃん　どう縁日　楽しかった？」
「ウン　楽しい　あのね　草団子食べたんだぁー　おいしいの」
「そう　良かったネ　お義母さん　待ってるわよ　お風呂入って、浴衣　用意してるって」
ななのちゃんが着替えて現れた時、僕はびっくりした。少し、お化粧もしているのか、眼のあたりも明るくて唇もくっきりしていて紅いような・・。そして、帯も後ろの部分が花のようにふわっとしていたのだ。
「どう　秀君　上出来でしょ　私　帯の結び方　練習していたのよ　ななのちゃんのためにネ」と、かがみさんが自慢げに言ってきた。
「そうか　すまんのー　ほんと　可愛いよ」
「でしょー　髪の毛もね」

かがみさんに言われて、見てみると三つ編みして途中で大きなコサージュみたいなので髪の毛を留めていたのだ。ななのちゃんも両手を伸ばして気に入っている様子だ。それも、僕には可愛く見えていて、その時、ななののお母さんには　申し訳ないけど抱きしめたいと思ってしまっていた。

そして、僕も浴衣に着替えて、早い目に寿司桶のものをつまんで、時間を見てぶらぶらと、花火がよく見えるほうに歩いて行った。ななのちゃんは、やっぱり、僕にぶら下がるように腕を絡めてきていた。僕も、ビールを飲んでいたので、いい気分になって歩いていた。

「シュウ　私　幸せやー　こんな風にしてもらってー　みんな優しいし　来れて良かったワァー」

6－2

実家から戻って数日後、夜、電話が鳴って、ななのちゃんのお母さんだ。

「もしもし　北番さん？　この前はななのがお世話になりまして、ありがとうございました」声がななのちゃんにそっくりなのだ。

「あー　いえ　僕も楽しかったです」

「ななのはなんかご迷惑なことしませんでした？」

「いいえ　みんなから可愛がられてましたよ　父母もウチは男二人だったから、女の子が欲しかったみたいで、楽しんでました。良い子だって、また、連れといでよって言ってました」

「そう！　うれしい　いくぅー」

「・・・ななの　だろう　なんかおかしいなって思った　からかうなよー」

「えへっ　ばれたか　お母さんのん借りちゃった　あのね　お礼にウチでご飯招待したいんだー　たいしたもん用意できないけどお母さんも、誘ってみなさいって言ってるしー」

木曜日、お母さんが休みだというし、僕が仕事を終えて向かうと、

途中までななのちゃんが出迎えてきてくれていた。

「あのね　私が、シュウのとこに行ってるのは内緒ね」

「もちろんだよ　叱られちゃうよ」

「ウン　今んところシュウはポイント高いから」

案内されたのは、３階建ての古いマンションで2階の端っこの部屋だった。

「いらっしゃい　狭いとこですけど、どうぞ　この子ったら、朝から、張り切っていて　北番さんに食べてもらうんだって」

そんなに広くないキッチンに連なっている部屋に座卓が置かれていた。それ以外にもう1部屋あるみたいで2Ｋのつくりで、確かにそんなには広いと思えなかった。そして、机のうえには、ちらし寿司が・・・一度、ななのちゃんが作ってくれたものだ。ななのちゃんが冷蔵庫からお刺身の皿を出してきてくれた。

「おビールしかないんですけど」と、お母さんがコップと出してきてくれて、継いでいる時、ななのちゃんが、お母さんにもコップを渡して

「お母さんも飲めばいいじゃぁない　ずーと　飲むのやめていたんでしょ」

「そっ　そう　じゃぁ飲もうかなー　お実家のほうから、いっぱい椎茸とかきゅうりをいただいてありがとうございます　それに、この子に浴衣までご用意いただいて　帰って来て、とってもうれしそうに話ししてくれました　ずーと、しゃべりっぱなしでー　楽しかったみたい　おみやげのサラダパンもおいしかったわー　私、迷ったけど、この子を連れて行ってくださって、本当にありがとうございました　ご両親にもお礼を言っておいてくださいね」

「いえ　いえ　ウチの両親も女の子だからって　とても楽しませてもらっているみたいですよ　ウチは男兄弟ですから、女の子が欲しかったってね　それに、なのちゃんは素直で良い子ですから　ご飯の用意なんかも手伝ってました」

「そう　私のご飯の用意も　家のことも掃除、洗濯　全部やってくれてるの　お料理も私なんかより、ずーと上手なんですよ」

その時、ななのちゃんがキッチンでなんかやっていたかと思ったら

「これっ　椎茸の肉詰め　お肉好きだよね　シュウ」と、焼き立てを持ってきた。

「・・・なの・・・あっ　この椎茸　いただいたの　肉厚でおいしいですよね　確か、ちらしにも入れていたみたい」と、お母さんが言っていたけど、ななのちゃん　ダメだよ　シュウってと、僕とななのちゃんは顔を見合わせていた。その時、ななのちゃんはお母さんにわからないようにちょこっと舌を出していた。可愛いと思っ

て、その肉詰めに喰らいついていた。

「うまい！　ななの・・ちゃん」僕は、お母さんのほうを思わず見ていた。

　その後、お腹がいっぱいになって、帰る時、お母さんが

「また　時々来てくださいね　ななのも　喜んでいるみたい　これからも　よろしくね　ななののこと」と、なんとも意図が不明なことを言われて、ほろ酔いで帰ってきた。

6－3

次の日、僕が帰るとななのちゃんが来ていて、勉強をしていた。実家に行って以来、ななのちゃんは髪の毛を留めたのをまた上に持ち上げるようにしていて、うなじが見えていた。僕は、この子もだんだんと大人に近づいているんだ感じていた。

「昨日はありがとう　おいしかったよ」

「うん　あのね　お母さんから聞かれちゃった　まさか、お付き合いとかしてるのって　名前呼び捨てで呼んでしまったから」

「ふーん　どうした？」

「そんなわけないじゃぁないって言っておいた　ただ　私はあの人のことが好きなんだと思うって言ったけど」

「・・・・」

「お母さんはネ　まだ、あこがれているだけよ　年も離れているし・・　確かに、いい人だけど　これから、多くの出会いがあって色んな人と知り合うわって」

「ななの　やっぱり　こうやって　ここに来るのは良くないよ　お母さんを欺くことになるよ」

「嫌！　毎日でも、シュウに会いたいモン」

「しかし、ななのちゃんは女の子だよ　娘が男のとこに、毎日行っていると知ったら反対するに決まっているだろう？」

「・・・だったら、シュウのお休みの水曜と、それに、土・日だけ私、お母さんに打ちあける　勉強教えてもらうからって言うワね？　いいでしょう？」

「わかった　ななのがそれでいいのなら」

6－4

ななのちゃんも学校が始まったのか、しばらく来てなかったが、水曜日、僕が部屋にいると

「こんにちわー　まだ　外は暑いやんかー」と、言いながらベッドのところに行って、スカートを脱ぎ出した。そして、スカートをベッドに丁寧に置いたら、ベッドにくしゃくしゃになっているタオルケットを敷き直しながら

「シュウ　くしゃくしゃのまんまやんかー　広げとかんと湿気たまんまになるでー　シーツもくしゃくしゃやしー」

「わかったよー　洗濯して、さっき　取り込んだとこなんや」

「そしたら　よけいやー　熱いままやったら　又　湿気こもるやんかー　広げて冷まさなー」

「うん　そーだな　ななのは本当に家事のこと万能やのー　それより　早く何か穿かないのか？」

「これ　オーバーパンツやんかー　この下にも穿いてるでー」と、ずり下げて見せようとしてきた。

「わかったよ　もう　いいよ」

「なんやねん　シュウかって　短パンやんか」と、カバンからプリントを取り出していた。

結局、上は学校のブラウスのままで下は紺色のパンツ姿で勉強を始めたのだ。しばらくすると

「これっ　宿題やってん　次は、数学の予習　わからへんかったら、聞いて良い？」と、後ろに馬の尻尾みたいに留めていた髪の毛を上にもちあげるようにして留め直して、おくれ毛を耳のうしろに描き上げるしぐさで僕のほうを見つめてきた。

そのしぐさにドキッしている僕のことを気に留めることも無く、ななのちゃんは数学の本を開いていたのだ。だけど、傍で本を読んでいる僕に何かを聞いてくるようなことは無かった。

「よし！　完了　数学は方程式になるんだぁー　まぁ　ちゃんとやってれば理解できるんだけどネ　わかんなくなったら、シュウ　お願いネ　今日は、もう帰るネ　暗くなる前に」と、スカートを又、穿きだしたけど、めくりあげるようにして

「このスカート　暑いから嫌いやー　長いし　うっとおーしい」とブツブツ言いながら帰って行った。

でも、確か今のは夏物になってるはずなんだけどなぁー。ずーと、あの子は短パンのことが多かったからなんだろうな。僕は、そうだ問題集を買っておいてあげようと思っていた。

6－5

次の土曜日。グラウンドをななのちゃんが後ろに束ねた髪の毛を振り回すように元気に走っていた。

僕がグラウンドの脇で見ていると、朝宮監督が寄ってきて

「北番君　女子のほうも試合をやってみようと思ってるんだ。とりあえず、隣のチームでね　そこは、社会人も入っているんだが・・・年齢はウチにあわせてくれらしい　練習だから」

「そーなんですか　いや　いいんじゃぁないですか　彼女たちも張り合い出るだろーし」

「うん　みんなもやりたいと言っていた。それでな　相談なんだけど　ユニフォーム揃えようと思うんだけど・・・それぞれの負担じゃぁ　どうだろーうな」

「あぁ　ななのの分は　僕はべつに構わないですけど・・　事情があって、負担となると重荷になる子もいるかもしれませんねぇー」

「だよなー　やっぱり　協賛金という形で父兄から集めたほうがいいかぁー　送迎のバスは僕の知り合いの自動車屋から借りて、僕が運転するんだがな　それは男子の時もなんだ」

「あのー　僕も　偉そうなことは言えませんけど、協力させてもら

いますんで　足らなかったら言ってください　監督もかなり負担してるんでしょ」

「まぁ　それは　僕の楽しみでもあるからな」

結局、目標には届かなくて、僕もボーナスから不足分を協賛していたのだ。併せて、ななのちゃんのシューズも新調することにしていた。

その日、僕が部屋に帰ると、ななのちゃんが、駆け寄ってきて

「あかんよー　こんなんにお金使わんとって」

僕は、数学と英語の問題集をテーブルの上に置いておいたのだ。

「どうして？　問題やっていったほうが実力つくよ」

「そーなんやろけどー　私は、予習復習もちゃんとやってるでー平気やーー」

「それは　わかってる　だけどな・・　こういうのやってると　授業では触れないこともわかるようになってくるんや　僕は、ななのが頑張ってるの知ってるからこそ　こういうことも必要だと思う珠には　言うこと聞け！」

「うぅー　わかった　でも　ありがとう　シュウ」

「それとな　明日　僕が帰ったら、スポーツ店に一緒に行く　朝宮監督のななののシューズ買いに」

「えぇー　要らん　要らん　そんなん」

「要らんことないやろー　もう、小さいはずだよ　この半年で、だいぶ背が伸びているよ　それに、横の方が破れ掛けている　貰ったもんだからな」

「シュウ　私・・・　そんなんしてもうてー・・どうしたら　ええのん？」

「だからー　前に言ったろー　ななのは　勉強もサッカーも伸び伸びとやって　明るく真直ぐに成長していってくれれば　僕も楽しいんだよ　今は、余計な事考えるなよー」

「・・・ウン　ええのかなー　シュウに甘えてて」と、下を向いていたかと思ったら、長いまつ毛を濡らして上目遣いで僕を見てきていた。僕は、動揺していたが

「いいよ　僕は、ななのの笑顔が好きだよ　さぁー　今日のご飯は？」

「えへっ　私の愛情たっぷりの　豚肉のオムレツあんかけとマカロニサラダ」と、可愛い笑顔を見せてきたのだ。

６－６　ななの初めての練習試合

　１０月になっての土曜日、ななのちゃん達は試合でバスに乗って出て行った。僕は、仕事があるし、残った男子の連中が年上の子を中心にグラウンドで練習していたから、何かあった時の為に、離れる訳に行かなかったのだ。

　お昼前、彼女達は帰って来たのだが、暗～い雰囲気だった。予想された結果だったのだけど、それ以上にショックが大きかったみたいだった。声も元気なく解散していった。

　部屋に帰ると、ななのちゃんも気のせいか元気無かった。

「どうした？　まだ　初めての試合だろー　そんなに甘くないよ」
と、言ったけど、彼女は膝をすりむいていたみたいで傷テープが

「怪我したの？」

「大丈夫　ちょっとね　パスを受ける時、こかされた　５対０」

「そうかー　しょーがないよな　向こうも遠慮はしないってことだから　ちゃんと手当したのか？」

「ウン　試合終わってから　向こうのお姉さんが親切にしてくれて私　悔しくて泣いていたら　あなた達はもっと声を出し合わなければ駄目って　キーパーの子が声出してるのに　他の子は知らんぷ

りじゃぁないって　それは監督も言ってた」

「そうかぁー　それは練習中も感じるなぁー　監督がもっと声を出し合ってヤレってんのに　声が小さいよ」

「だってさー　そんな大きい声　しんどいやん」

「だからよー　みんなを励ます意味でも　私はここに居るよって合図しながら相手に知らせてパスもらうんやー」

「そうかー　そんなことも私　わかってへんかってんなー　リョウの声　聞き流してたわー」

「まぁ　いい経験だよ　又　１か月後　試合やろー　皆で、今回のことを考えて練習すれば　強くなっていくよ」

「ウン　頑張る　シュウ　今のシューズ　すごく　走りやすい　ありがとう」

「そうか　それは良かった　将来のなでしこジャパン」

「だからー　アホかぁー　私はシュウの飯炊き女にしてもらえればええねんやー」

６－７

１１月になって、レディース達はバスに乗って出て行った。あれから、声もかなり掛け合うようになっていたので、僕は今回は成長しているだろうと期待してていた。

そして、帰ってきた時、賑やかな雰囲気は無かったが、彼女達は男の子達が練習しているグラウンドの隅で、パス回しをしていた。声を出し合って確認している様子だった。朝宮監督が僕の元に来て

「３対１で負けたけど、なかなか良かったよ　チームとしても成長しているよ　彼女達から、もう一度、忘れないうちに確認しておこうよ言い出した　手応えを感じているんだろう　初得点もしたしな」

「そうですか　いい雰囲気だ　楽しみですね」

「ああ　３年のアミがリーダーとしてしっかりしてきたけど、もう卒業なんだよなぁー」

その日、帰るとテーブルに英語の教科書を広げて

「今　火点けたとこ　ロールキャベツ」

「そう　いつも　手の込んだもの作ってくれるネ　ありがとう」

「ううん　そんなに　手かからないよ　今も　勝手に煮込んでくれ

るし」
「ななのは料理の天才だよ　今日の試合　まずまずだったらしいな」
「うーん　リョウが結構　止めてくれたからね　だけど　私等　まだまだパスがつながらなくてゴール前まで遠いんだぁー」
「でも　監督は　チームとして成長していってるって言ってたよこれからだよ」
「そうだね　シュウもコーチしてくればいいのにー」
「僕なんて　たいしたことないよ　まぁ　機会あったらネ」
「でもね　しばらく　試合もないから　走り込み中心だって　練習でもね　走るの嫌いって子　多いんだ　走んないとパス　通らないよネ」
「ななのって　何にでも　センスあるような気がするよ」
「そんなことないよー　私　必死なんだからー　シュウの為に・・・」

６−８

　１２月になって、ななのちゃんが
「シュウ　冬休みになったら、又、ウチに来てーなぁー　私のお誕生日とクリスマス」
「えぇー　ななの　１２月生まれやったんかー」
「ウン　１２月２３日　１３歳」
「そうかー　それは　お祝いしないとな」
「シュウは　いつ　誕生日？」
「あぁ　３月７日」
「ふーん　じゃぁ　そん時　また　お祝いだネ」
「いいよー　これっくらいの歳になると、そんなにめでたくもないから」
　そして、クリスマスも過ぎて居たけど、お母さんの休みだという日にななのちゃんの家に行った。僕も、定休以外の日の休みを取っていたので、お昼過ぎに伺っていた。

「ななのちゃん　これっ　誕生日祝い」と、部屋に入って直ぐに渡したら

「わぁー　ありがとう　シュウ・・さん」と、ななのちゃんも慌てていた。

「開けて　いい？」

「ウン　何がいいのか　迷ったけど」

僕は、ピンクのキラキラしたラインが入ったスニーカーを選んでいたのだ。ななのちゃんは開けると直ぐに、僕にお礼を言ってお母さんに見せに行って、履いて見せていた。

「大きさ　どうかなー　合わなかったら、代えてくれるって言ってたけど　少し、大き目にした」

「ウン　大丈夫　中敷で調整する　ありがとうネ　これ　可愛い」

その日は、僕の為に焼肉を用意してくれていたけど、逆に散財させてしまってと僕は、恐縮しながら食べていた。

「北番さん　遠慮しないで食べて飲んでネ」と、お母さんは僕にビールを継いできてくれていた。

「あのね　ななの　通信簿　音楽を除いてオール5だったの　1学期もそうだったんだけど、たまたまなんだと思っていたら、今度も

でしょ　びっくりしちゃった　北番さんにも教えてもらってるから
　この子　頑張ってるんよネ」
「そーなんですか　ななのちゃん　すごいネ　サッカーも頑張って
るし」
「うふふっ　だからー　私　いつも必死なんやって　ゆうてるヤン」
　そして、帰る時、ななのちゃんが表まで見送ってくれて
「なぁ　お正月　実家　帰るんやろー　私もー」
「えぇー　お母さんは？」
「うん　仕事やと思う　勉強のご褒美にって　ゆうたら　許してく
れるとおもうネン」
「まぁ　ウチは歓迎すると思うけど・・　お母さんの許しがないと
な　それにお母さんだって寂しがるだろー　いくら　仕事といって
もー」
「ウン　元旦の朝　お祝いしてから、今度は一人で行くよ　木之本
まで　もう、子供やないねんから・・それっくらい　平気　たぶん」

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~28178

その小さな女の子のことが気になってしまったんだが、どう接していけばいいんだろう
2023年03月30日　15時59分発行